ＲＰＧ始めました

空雲雛太

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＲＰＧ始めました

【Ｎコード】
Ｎ４８２１Ｗ

【作者名】
空雲雛太

【あらすじ】
新しい妹が増えた。
感情の読めない表情で、彼女はこう言った。
「初めましてマスター。私に名前をください」
これは、風車に戦いを挑んだ滑稽な道化の喜劇を、面白おかしく綴った物語。

プロローグ

この物語は活劇ではなく喜劇だ。

春風　薫（　はるかぜかおる　）は俺の通う暁高校の有名人だ。

もっとも、それは頭がいいとか運動ができるとかではない。

春風　薫という女生徒はその性格が有名なのだ。

重度のお人好しにして、極度のお節介。

それが入学からたったの1週間で名を馳せた春風　薫のキャラクターだ。

通りすがりのおばあちゃんの荷物を持つとか、家無き人に仕事を紹介したとか、自分を殺そうとした殺人未遂犯の裁判に弁護側で出席したとか。

そして、そんな噂（　百歩譲って二番目はともかく、さすがに三番目は嘘だろう　）に真実味をもたらす、彼女の親切への執着。

誰にでも分け隔てなく、誰であれ優しく接するという彼女の逸脱ぶりは、もはや校内に知らない者はいなかった。

とはいえ、本人の前で困ったりしなければ実に無害であったし、頼めば掃除当番、黒板消し、ゴミ捨てにプリント運びと、皆が嫌がる雑用でも嬉々としてやってくれるので、教員を含めた全員に重宝されていた（　彼女の乱用を防ぐための委員会が設立されたほどだ　）。

そんな彼女の前である日、不覚にも俺は困ってしまった。

そのせいで俺は、荒唐無稽な事件に巻き込まれていくことになる。

いや、この言い方はきっと正しくない。

発端は俺の間抜けな失敗だし、巻き込まれたというより勝手に首を突っ込んだと言ったほうが正しいと思う。

そもそも事件など最初から起きていないとさえ言えるだろう。

だからこれは、きっと風車に戦いを挑んだ、滑稽な道化を描いた喜劇なのだ。

昆布を食べるとハゲにならないって本当？

「あれ？おっかしいな…」「うん？どうしたの淋漓（　りんり　）？早くお昼ご飯食べようよ」　　「いや、その昼メシがねーんだよ」　　楽しくて仕方がなかった４時間目の現国の授業が終わり、さぁ昼メシにしようとした矢先のことだった。　何度も鞄の中を確認しても、やっぱり弁当がない。　ただ、こういうことは以前にもあったので、白状しろという意味で最有力容疑者を睨み付ける。　　容疑者もそのことに気付いたらしく、２つに結んだ髪を揺らしながら大袈裟に反応した。

「むむ！？にーちゃんから疑いの眼差しを感じる！！」　「お前には前科があるからな」　　「まったくひどいなァ１週間に１回のペースで盗み食いしてたからって…。」　そんだけの前科があれば容疑で済ませている俺は優しいほうだと思う。

「クロちゃんも何か言ってやってヨ～」　　そう言って妹のぐみは、俺の向かいに座っている男子生徒に同意を求める。　「そんだけ前科があったら疑われても仕方ないんじゃないかな…」　　「まさかの四面素麺！？」　「夏場なんかは良さげだな」　　四面楚歌と言いたいのだろう。

頭の悪い妹は少し唸ったあと、勢いよく右手を上げた。　　「異議あり！今回の現場は明らかにこれまでと手口が違うであります隊長！」　「裁判官が隊長なのか」　　なかなかシュールな絵だ。　　しかし、確かにぐみ（　漢字があるのだがダルいのでひらがな表記で統一　）の言い分にも一理ある。　　これまでの《強欲な捕食者》（　↑食事どきのぐみはこう呼ばれる　）の手口は「人の弁当を無断で半分近く喰い漁る」というものだった。

今回のケースは、弁当箱そのものがないのだ。　　つまり、普通に俺の過失である可能性がある。　　「いやーあたしも盗み食

いしようとしたらお弁当がなくってびっくりしたよー」「…お前よく自分の無罪を主張できたな」　「だーって食べてないもーん」　「…午後　０時３７分、盗み食い未遂で逮捕ー」　「オナカガスイテテツイ…ハンセイシテイマス」

俺がテキトーな罪状を読み上げ、ぐみが変な声（　おそらくボイスチェンジャーを表現していると思われる　）で謝罪する。

半ば恒例となったやり取りを終え、いつもならこのままいただきますなのだけれど、今日はそのいただく弁当がない。

「はーぁ…どーすっかなー」　「購買は？ご飯がないんじゃ、仕方ないよ」　「いやでもよ…腹が減ったぐらいじゃ食えねーだろあれは」　「あー…まぁ、そうかも」　苦笑いを浮かべ、俺に同意する黒兎（　こくと　）。　うちの高校は購買部の利用者が多く、まともなメニューは昼休み開始から5分で消える。　では残ったメニューはまともじゃないのかといえばその通りだ。　我が校の購買部は実に開拓者精神に溢れており、通常メニュー完売後は蠍（　さそり　）サンドとかエスカルゴのおにぎりとかカブトムシスティックとかいった不思議の国のキテレツメニューがずらりと並んでいる。　果敢に挑戦したやつの証言を信じるのなら「キテレツなのは見た目だけ」とのことだが（　まぁそうでなければ何のための購買だという話だが　）、俺は遭難でもしない限り食べたいとは思えなかった。　ちなみにうちの高校に食堂はない。

「となると兄ちゃんはお昼抜き？」　「お前いつも俺の弁当盗み食いしてるんだから、今日ぐらい俺に譲れ」

「なぜ盗み食いをするのか…。それはこれじゃ足りないからなのさっ！」　前半はかっこつけ風に喋っていたが後半は飽きたのかかっこつけていたのを忘れたのかいつものテンションだ。

たぶん両方だろう。　「じゃあ僕のお弁当分けてあげるよ」　「お前の弁当食うぐらいなら購買行く」　「僕のお弁当カブトムシスティック以下！？」

すごくびっくりしている。　　俺に言わせれば、ここでびっくりするお前がびっくりだ。
「たまには食べてみてよ！きっとキテレツなのは見た目だけだよ！」　　そう言って彼―――弁天財（　べんてんざい　）黒兎は自分の弁当を差し出してくる。しかし…
「僅かな可能性に賭けて聞くけど、弁当全体を塗り潰すようにかかっているこれは何だ？」　　「チョコレートだけど？」
「どうしてここで『何を当たり前のことを』みたいな顔が出来るんだ！！」　　ソースなら！　　せめてソースなら受け入れられるのに！　　「どうしたの？何か困りごと？」
黒兎のチョコ弁当かキテレツ大百科な購買かで悩む俺に、誰かが声をかけてきた。　　校内の『この声に子守唄を歌ってほしいランキング』（　一体誰だこんな馬鹿なランキングつけたやつ　）ベスト１に輝いたらしいその声に、俺は戦慄した。　　この学校で平穏に過ごすためには、その声の持ち主の前で困った素振りを見せてはいけないのだ。　　「ありゃ、緑野（　みどりの　）くんのお弁当が見当たらないねぇ。もしかして忘れちゃった？」　　「…うん、まぁ…」　　「おけーい、ならば私のお弁当を分けてあげましょーぅ！」
そう言って。　　学校１のお節介、春風　薫は、春の日差しのような笑顔を俺に向けた。　　俺はそれに対し、抵抗しようという心を追い出すように息をはいて、自分の間抜けを恨むとともに口を開く。　　「…ありがと。で、今度は何だ？キテレツ大百科、チョコラー弁当ときて、次は箱ごとシュガーコーティングか？」　　春風の恐ろしさは、その親切を受け取り拒否させてもらえないところにある。
だからつまり、春風が弁当を分けると言った以上、それがどんなに突拍子もない弁当でも、俺が受け取るまで彼女は決して引いてくれないのだ。　　しかしどうやら、今回は俺の戦慄は杞憂に終わりそうだった。　　「何の話かわからないけど

…私のお弁当は、とっても普通だよ？」　「自分のことを普通だとか言うやつに限って普通じゃないんだよ」
「…緑野くん、初めて話す人が相手でも容赦ないんだねぇ～」
まぁでも、裏表なさそうでいい人っぽいね。
そう言ってから、春風は自分が普通だと思う根拠を述べた。
「だって、ケチャップとかマヨネーズとかをどびゅーっ！っとかけたりしてるわけじゃないし、中身はスーパーとかで普通に買えるやつだし！」　「…マジ？」
「マジマジ」　「…んじゃ、少しもらっていい？」
「まいどあり～！」　てれれってれ～。
べんとうばこをてにいれた！　「ってまるごと一箱！？」　「？中身はちゃんとあるよ？」
「いや別に『実は空の弁当渡したんじゃね？』みたいに疑ったわけじゃなく！」　こいつ本気で言ってんのか！？
他人にまるごと一箱の弁当を渡すということは、自分の昼メシが無くなるということだぞ！？　「あぁ～そのこと？心配してくれてありがと～。でも大丈夫だよ～」　そう言って春風は、何ともうひとつ弁当を取り出して見せた。
「こんなこともあろうかと、お弁当はいつも2つ！持ち歩いているのです！」　「…あそう」　何というかもう…脱帽だ。
狂っているとさえ――言えるかもしれない。　春風はそう言うと、あの春の日差しのような笑顔で戻っていった。
「であであ！またね～緑野くん！」
満足したらしい。　友達の輪の中に戻り、昼食を再開した春風を視界の端に見ながら、俺はぼんやりともらった弁当を眺めた。　春は始まりの季節。　しかし、始まるのは何も希望だけじゃない。　春の日差しは――危険な生き物だって目覚めさせる。　春風　薫。
彼女はあの笑顔のしたに何を潜ませているのだろう。

何を…隠しているのだろう。

「……」　そんな益体のないことを考えながら弁当を開けると、そこには深い緑色の野原が広がっていた。

ていうか昆布しか入ってなかった。　主食からおかずに至るまで全部乾燥昆布（　しかも戻してない　）で統一されている。

「…なぁ可愛い我が妹よ」「なんだい可愛い我が兄ちゃん！」　兄に向かって可愛いとか言うな。　最近流行りの（？）男の娘じゃあるまいし。

「…弁当、やるよ」　「ごめん！あたしも無理っ！」　「……」　視界の端で、春風の友達が苦笑いを浮かべているのが見えた。

天井を仰ぎ見ると、どこからか「御愁傷様」というセリフが聞こえた気がした。

妹持ちに妹萌えはいないって話はよく聞くけど、妹持ちに妹燃えはいないって話はよく聞くけど、妹持ちに妹萌えはいないって話はよく聞くけど、

半ば拷問のような昼休みから2時間が経ち、俺とぐみは自宅に続く道を歩いていた。　　あの弁当を頑張って完食したせいで、いまだに口の中が昆布一色だ。　　「情けないぞ兄ちゃん！あれきしのお弁当に負けるなんて！」

「…んじゃ今度のお前の弁当は乾燥昆布の詰め合わせな」

「お、お代官様！何とぞお目こぼしを～！」

「…ならん！儂を怒らせたらどうなるか思い知らせてくれようぞ！」

「あーれー！」　　そう言いながらその場でくるくると回り始めるぐみ。　　俺の名誉のために断っておくが、決して俺が回したわけじゃない。　　「けど完食したんだ、負けじゃないだろう」　　「そーだけどその後ダウンしたんだから、勝ってもいないのさ！」　　「しかしそうは言っても乾燥昆布だぞ？あの文字通り山のような量の乾燥昆布を飲み物無しで食いきった根性は評価してくれよ」　　「甘いね！その根性論で同情を誘う手法はクロちゃんのチョコ弁より甘いよ！」「マジでか」　　「マジだよー昆布だって工夫次第でレパートリーが増えるからねー。あそこで調理という選択肢を選らばなかった兄ちゃんの負けはやはり揺るがないのだよ！」「でもそれってボリュームも増えないか？」　　というか。

昼休みに調理の選択肢を選ぶのもそれはそれでどうだろう。　　「そこであえて本格中華にチャレンジすることで読者に自己アピールするんだよ！兄ちゃんはただでさえ平凡だからね～積極的にアピっていかないと忘れられちゃうよ！」

「ほっとけや！」　　つーか語り過ぎだ。

いつまで引っ張るんだ昆布ネタ。　　「行けるとこまで行こうよ～、なかなかないよ～こんな機会」　　「頻繁にあったら俺は不登校になるな」　　「それは困るね

ぇ、困っちゃうねぇ」　「盗み食い出来なくなるからか」　「ターゲットがチョコ弁一択になっちゃうからね」　「せいっ」　ひっぱたいた。　「滅多にないと少し加減してひっぱたいた。　今までのやり取りをなかっいえばさぁ」　心なしか顔がたことにしたみたいに話題を切り替えるぐみ。　「少し赤い。「…そろそろ、生まれるかも」　こいつにこん…ほぉ」　少し驚いた。　な器用な真似ができるとは思わなかった。意外な切り札を持ってるじゃないか。　辺りを見回し、誰もいないことを確認する。　ふむ。　奥の手を見せてもらったお礼だ。　構ってやるか。

「生まれるってまさか…！？」

「…ん」　頷きながら愛おしそうにお腹に手を当てるぐみ。　当然そこには誰もいない。

「…新しい家族。今朝からずっと、もしかしたらって思ってたんだけど…」　「マジかよ…相手は誰だ！？」

「相手は…実は兄ちゃんなのだー！」　「な、なんだってー！」　「そんなことより、帰ったらモンハンやろモンハン！」　「新しい家族が『そんなこと』！？」

もう飽きたらしい。　仔犬みたいな妹だった。「で？どれに生まれるんだ？」　「うーん…具体的にはわからないけど、たぶん兄ちゃんが身につけてるやつのどれかだと思う」　「そうか…。制服とかだったら困るな」　「着るときは戻ってもらえばいいじゃん！」

言ってぐみは、にかっと笑ってみせる。

九十九神。　器物百年を経て化して、精霊を得てより人の心をたぶらかす…の、九十九神だ。

今の会話はつまり、俺の持ち物のどれかに九十九神が生まれるという意味だ。　俺の隣で能天気に笑っているぐみ

も九十九神なので（元々は俺が子供の頃大事にしていた本だ）、同族の誕生にいち早く気付いていたようだ。　もっとも、ぐみにしろ俺の持ち物にしろ、本当に百年ものなわけではない。　この世界は２０年前、妖怪変化起きやすくした事件が起きたからこそ短時間で命を得たのだ。　「まぁ、とりあえず名前だな。家帰ってなんか考えるか」　そう言って、気持ち早めに俺は歩く。

２０年前、怪異の存在が公に認められ、人と妖は手をとりあって生活するようになった。　多くの苦労があったらしい。　今でも災害指定が解除されていない人を殺す怪異というのはいるし、相手の存在を受け入れられない者もたくさんいる。　人側にも怪異の側にも。俺の通う暁高校は世界初の人魔共学の学校として、人と妖怪の間の差別や溝をなくすための活動をしている。だからクラスメイトの中には、当然人間じゃないものもいる（ちなみに春風は人間だ）し、ぐみの持ち込みが許されているのだ。

閑話休題。　とにかくそんな世の中だから、怪異の類いや妖怪変化が現れやすくなっている。

怪異に遭うと怪異に引かれる。　怪異がある日常では日常的に、雨が降るように風が吹くように朝に起床し夜に就寝するように―――怪異は生まれるのだ。　「……」　いやまぁ。　怪しく異なると書くだけあって、発生にはある程度条件が揃わないとならないのだが。

雨や風より台風のほうが近いかもしれない。　「ただいまー」　うちの両親は共働きなため、家にはいない。

しかしどうやらうちは九十九神が生まれやすい環境らしく、家に帰ると両親の持ち物が出迎えてくれる。「お帰りなさいませ坊っちゃん！ご飯になさいますかおやつになさいますかそれともお夜食ですか！？」　「メシ以外の選択肢がねぇ！」

うちの九十九神は食い気ばっかりだ。　「…お

や？今朝がた感じた九十九神の気配が強くなっていますな」
「あぁ、やっぱりそうなんだ…。」　　ぐみの観測ミスとかではないらしい。　　「いやぁめでたい！男の子でしょうか女の子でしょうか…」　　「…いや九十九神って器物に命が宿ったものだろ？ジークやぐみみたいに人の姿を持つのは異例であり特例なんじゃないのか？」　　子供の頃――それこそぐみが生まれる前は今話しているジークフリート（シャツの九十九神で、命名したのは母さんだ。ちなみにぐみは父さんの命名）を見て育っていたから、九十九神になった物は人の姿になるとばかり思っていたけど。　　「その『思っていた』が重要なポイントですね。怪異は元々物語や伝承の中にしかいない空想の産物です。いると思えばいるしいないと思えばいない。器物に命が宿ると認識すればそうなるし、器物が人になると認識すればそうなります。百鬼夜行の総大将ぬらりひょんも、最初は『人の家に勝手に上がり込む』という設定さえなかったのですよ」　けっこういい加減なんですよ、我々は。
ジークは自嘲気味にそう呟くと気持ちを切り替えるようにパンッ！と手を叩いた。　　ジークの長い説明に船を漕いでいたぐみがびっくりしたように背を伸ばす。「では今日の晩御飯は赤飯ですね！新たに生まれる九十九神の登録準備もしないといけませんし、忙しくなりますねぇ」　　ジークはどことなく嬉しそうにそう言うと、台所に姿を消した。
親がいない間は家事の一切をジークが仕切ってくれるので、料理は母さんが作るのよりうまい。　　小さい頃、うっかり母さんの前でそう言ったら泣かせてしまった。　　感受性が大豊作な緑野家の母である。　　「兄ちゃーん！早くモンハンやろーぜー！」　　「あのなぁ…先に新しい家族の名前を考えなきゃならないだろうが」　　「うん？何で？」　　「……」　　何でと来たか。　　我が妹は新しい家族が心底どうでもいいようだ。　　「いやさ、そうじゃなくて。

あたしやジークみたく、お父さんかお母さんにつけてもらえばいいじゃん？」　そんなことより遊ぼうよー、とか。
ぐみの中では『新しい家族＜俺と遊ぶ』の図式らしい。
悪い気はしないが、いつ戻ってくるかわからない両親に丸投げするわけにもいかない（連絡がつかないことさえある）。　どうやって説得したものかと頭をひねっていると、２階に上がる階段の上からぐみが話しかけてきた。「兄ちゃんはあたしとその子、どっちが大事なの！？」「お前は俺の何なんだよ」　下校中にもやっただろ。　マッハで飽きたくせにまたやるのか。　ぐみは元が本であるせいか、よくこういうごっこ遊びをせがんでくる。　小さい頃はロリコン役だのシスコン役だのと、俺が意味を知らなかったのをいいことにそういう役をやらされていた（俺の名誉のために断っておくが、そういう性癖があったわけじゃない）。　最近では下校中や今のこれみたいに、おそらくは夫婦や恋人のような役を要求されている。　まぁロリコン役やシスコン役よりマシだが、さすがにこの歳でごっこ遊びは精神的にきつい。
適当に流して話を進めるかと思った俺だが、ぐみの迫真の演技がそれを思い留まらせる。　「ひどいよ…あたしはただの遊びだったの！？」　「……」　なるほど…今回はどうやらぐみ演じる伴侶（詳細は不明）に俺の演じる役（彼氏役か夫役かはわからない）が浮気の嫌疑をかけられているシーンか。　しかし…いつの間にか演技のレパートリーが増えたなぁ。　馬鹿だ馬鹿だと思っていたけど、いつまでも馬鹿のままじゃないんだなぁ…。　妹の成長は嬉しいやら寂しいやらで、兄としては少し複雑だ。　よし、腹ァくくったぜ。　こうしてぐみと遊べるのもいつかできなくなってしまうんだ。　後悔のないよう、全力で遊んでやろうじゃないか！　意を決して階段をのぼる。
ぐみは少し拗ねたような顔をして、上目遣いに俺を睨ん

でいる。
「そんなわけないだろ？俺の一番はいつだってお前だよ」
…なんか浮気の常習犯みたいなセリフになってしまった。
しかも若干鼻につく。
もし俺の前でこんなこと言ってるやつがいたら、俺は全力でそいつを殴るぞ。「……っ」
ぐみも同じように思ったらしく、顔を赤くしてそっぽを向いてしまった。
かなりお怒りのようだ。「…そんなの嘘だもん…。兄ちゃんはそもそも、あたしを女の子扱いしてくれないんだし…」
ボソボソと何かを呟くぐみ。
…そうか。
呪いの呪文を口にするほど腹がたったか。
ごっこ遊びとはいえ、自分の亭主があんなセリフを言うのはそんなに許せなかったか…。
仕方ない。
ぐみの機嫌取りもかねて、少し路線を変えてみるとしよう。
今度は不器用な口下手キャラっぽく、言葉ではなく行動で示す方向でいってみた。
具体的には、ぐみに抱きついた。
「〜〜〜〜〜ッ！！！！」
腕の中でぐみの体が緊張に支配されたのが伝わってくる。
やっぱいきなり抱きつくのはびっくりするか。
とりあえず落ち着かせるために頭を撫でてみよう。「〜〜〜〜……っ」
今度は全身から力が抜け、腕の中から落ちそうになる。
どんだけ落ち着いたんだよ…。
子供の頃は、こうするとどんなにぐずってても泣き止んでいたから、もしかしたら機嫌を直してくれるかもと思ったのだが…予想以上の効果だった。
力が抜けてうまく立てないのだろう、ぐみは俺の背中に腕をまわして抱きついてきて、弱々しく口を開く。
「…大好きだよ、兄ちゃん」
……。
弱々し過ぎて聞こえなかった。
まぁ今回のごっこ遊びは『浮気亭主とその妻』みたいなお題だったはずだから、たぶん「もう浮気しちゃだめだよ」

的なことを言ったのだろう。　　ならば俺の返答は、これが正解なはずだ。　「…ああ、分かってるよ」「…んっ、なら良し！」　そう言って離れるぐみはまだ機嫌が直りきってないのか、いくらか顔が赤くなっている。　しかし表情は願いが届いたみたいな笑顔であるところを見ると、一応は及第点だったようだ。　「じゃあ（ごっこ遊びも終わったし）新しい家族の名前を考えるか」　「うん？あたしも一緒？」「当たり前だろ、家族なんだから」　「あたしはいいよー面倒くさいし。それよりＰＳＰ貸してー！」　「貸すかっ！人の尻ポケットをまさぐるな！」　さすが我が妹。　俺がどこに何をしまっているかを完璧に把握している！　「あたしもだてに兄ちゃんの妹やってないよー！兄ちゃんのことはホクロの数さえ知ってるよ！」　「……」　それはそれで怖いんだが。　しかしそれを言うなら妹よ、俺だってだてにお前の兄ちゃんやってないぜ！　ホクロの数はさすがに知らねーけどな。　「手伝ってくれたらゼリーやるから」　「……むぅ……」　あれ？　おかしいな、いつもならコンマゼロで飛びつく（文字通り俺に飛びついてくる）のに、今日はリアクションが薄い。　調子が悪いのか？　「だって…新しく生まれる子が女の子だったら、倍率が上がっちゃうし…」　「倍率？何の話だ？」　狙ってる学校が女子大とかなんだろうか。　それでも1人くらいじゃ大して変わらないと思うし、何より名付けを拒む理由にならない。　「だって、持ち主に名前をもらえるなんてずるいよ…。あたしはお父さんだったのに不公平だよ…」　「ぐみ、何を言っているのかよく聞こえん。気に入らないことがあるならはっきり言え」　「兄ちゃんが名前をつけるのが気に入らない！」　…えぇー。　何それ、俺のネーミングセンス全否定？　そうか…俺の考える名前はダサいのか…。

「兄ちゃん…何でそんなに落ち込むの…？そんなに名前を付けたがるってことは、やっぱりあたしより新しい子のほうが大切なの！？」　また泣きそうな顔になるぐみ。
…泣くほど俺のネーミングセンスはひどいのか。　それじゃあ仕方ないな。「名前はぐみに任せるよ」「…あたし？」
目に涙を貯めながら不思議そうな顔をするぐみ。　少し子供の頃を思い出す。
「俺が名前をつけるのが嫌なんだろ？だから、ぐみに任せる。いい名前を付けてやってくれ」
「その手があったか！！」　「…どの手が？」
というか何に対してだ？「ふふふ…そうだよそうだよそうなんだよ！あたしが兄ちゃんより先に名前を付けちゃえば新しい子はあたしと同じく兄ちゃんからは名前がもらえないんだよ！いい名前？まっかせてちょーだい、兄ちゃんはＰＳＰとかやって待っててねー！」
…早口過ぎて聞こえなかったが、何やら不思議な理由でぐみのテンションが上がった気がする。
名前がどうとか言ってたような…あいつも姉として、新しい兄弟に名前をあげたかったのか？なら何で最初は嫌がってたんだろう…。
よくわからん。　しかしここで本当にＰＳＰとかやったら、妹に仕事を押し付けて遊ぶ兄みたいで精神衛生上よろしくない。　１階に行って、ジークの手伝いでもしようかと考えたその瞬間だった。
俺はホタルにジョブチェンジした！
正確に言うと尻が光った。　「ちょっ…何だコレェェェ！？」　「どうした兄ちゃ…っ！？兄ちゃんがホタルにジョブチェンジしたぁぁぁ！！」
だよねやっぱそうだよねこれ！　「いや待て慌てるな一旦落ち着こう！！まずは原因の究明だぐみ二等兵！」
「りゃりゅりょ了解しました兄ちゃん隊長！！」　ポンコツと化した兄妹の調査の結果、『尻が光っている』という情報は、正確だったけれど正しくはなかった。　「

これ…ＰＳＰ…？」　ぐみが俺の尻ポケットから取り出したＰＳＰを眺めて呟く。　ＰＳＰからは光とともに数字の１と０が溢れ出ている。　この様子は――ぐみが生まれたときによく似ている。

そう思うのと同時に視界を覆い尽くすほどの光が溢れ出る。

やがてそれが少しずつ収まると、薄れゆく光の中に人影が見えてきた。　身長はぐみと同じくらいの――――少女。

溢れ出る光と１や０とともに宙を踊る髪は、澄んだ昼間の空のような青。　ゆっくりと開かれた瞳はそれとは対照的に、夜が明ける頃の海のように深い青色を称えている。

光が完全に収まると、生まれたての九十九神は感情の見えない人形みたいな顔を俺に向け、抑揚のない…それでも生まれた喜びを感じさせる声で、俺に語りかけてきた。　「初めましてマスター。私に名前をください」

別に見ていたんじゃない。たまたま視線がそこに向いただけだ

「…どうしたの緑野くん？何だかお疲れみたいだけど…」

「あぁ…春風か…」　疲れた人も親切のターゲットなんだな、とか言いながら、机に伏していた顔を持ち上げる。

春風は「そのセリフだと私が殺し屋みたいだねぇ」と苦笑いしたあと、自分の主張を声に出す。　「だって昨日と比べて、明らかに元気がないんだもの。何かあったのかなーって、心配になるでしょう？普通」　「…どうだろうな」　たったそれだけのことで、俺はほとんど関わりのない誰かに声はかけない。　大阪の人ならやりそうなイメージあるけど。人情の街っていうし。　でも、春風のそれは少し違う気がする。何ていうか、親切であることを自分に強いてるみたいな――。「それで、何かあったの？」　「……」　話を戻された。　何かあったことを白状するまで、彼女は納得してくれないらしい。

まぁ、隠すようなことでもないしな。　「昨日、九十九神が生まれたんだよ」　「わぁ、そうだったんだー。おめでとう～」　言って、にぱっと無邪気に笑う春風。

その春の日差しのように暖かな笑顔は、新たな命の誕生を自分のことのように喜んでいる。　「いいな～九十九神。私もねぇ、お気に入りのお人形さんが喋ってくれたらいいなーって、いっつも思うもん。やっぱりその子も、ぐみちゃんみたいに女の子なの？」　「まぁそうだけど…」

なぜ女の子一択なんだ。　男の子の可能性は全否定か。

「いやぁ、私もそんなに詳しくないからね。九十九神が人の姿をとる場合は女の子なのかなーって、勘違いしてただけ」

要するにさっきのセリフは「新しい九十九神も人型なの？」という意味だったらしい。　それならそう

と言ってくれればいいのに。『人型』のほうが一文字お得だぜ？
勘違いというより見当違いだ。　「うん？でも、
どうしてそれで、緑野くんが疲れるの？」　「
……いやぁ」　もうその話はよくないか？
引っ張り過ぎだろ…行数稼ぎと思われるぞ？　「
行数も路銀も稼がないよ。私はただ、それが私に背負える荷なら分
けてほしいだけ」　1人で背負うより2人で背
負ったほうが、楽だから。　春風はそう言
った。　「…ぐみと新しい九十九神が、名前で揉めたんだ」　「
名前で揉めたって？」　「名付け親が誰になるかでひと悶着あった
ってだけ」

◇

「初めましてマスター。私に名前をくださ
い」　彼女が生まれて最初に要求したのは、自分の名前だった。
とはいえ、過去にも同じように要求された経験
を持つ俺は特に慌てることなく、その要求に応えようと努力する。
「そうだな…お前の名前は…」
「あたしが考えるっ！」　元気よく右手を挙げるぐみ。
彼女は表情を変えず、しかし不満そうに抗議す
る。「…私はマスターにお願いしました。姉さんは休んでてくださ
い」　「おぅおぅおぅ、あたしの名前が受け取れねぇっ
てのかい！？」　酔っぱらいかお前は…。「はい、
受け取れません」　容赦ねぇ！！　「…にいちゃーん…」
お前も妹に泣かされんなよ！！いや気持ちは分かるけどさぁ、
もーちょい頑張れないか！？　「…姉さんも九十九
神なら分かるでしょう。持ち主から名前をもらうということが、私
達九十九神にとってどれほど幸せなことか」　妹の幸せを、姉さ
んは邪魔するのですか。　感情のこもらない声で、彼女は
そう言った。　ていうか幸せって。　そこまで言うか。
「そこまで言うよ！あたしたちはねぇ、持ち主に名前を呼ん
でもらいたいから生まれてくるんだよ！！その名前が他の誰かにつ

けられるあの絶望を、兄ちゃんは知らないんだよ！！」　「…そうなのか？」　「まぁ、おおむねそんな感じです。」
マジかよ。　そうだったのか…あの時はネーミングセンスに自信がないからって父さんに任せたけど、かえって悪いことしたかな。　「あたしはにーちゃんからもらえなかったのに、名も無き妹はにーちゃんに名付けてもらえるなんて不公平だよ…！そんなこと、ゼッタイさせないもん！」　「いいでしょう…マスターから名前を頂くためなら、姉の屍も乗り越えてみせます」　「乗り越えんな！」
名前がどんだけ大事か知らねーけど、家族の屍越えてまでもらうほどの名前なんざ用意できねーぞ！　「食らえ哀しみの必殺、ぐみチョップー！」　「痛っ」　降り下ろされたぐみの手刀を避けきれず、肩に直撃を食らい、わずかながら顔を歪める新しい妹。　…マジでやりやがった。　いやまぁ、まだじゃれあいのレベルだけど、兄妹喧嘩って（他の家はどうだか知らないが）こういうことから発展して始まるしな…。
「…この威力、ただの手刀ではありませんね」
「ふっふーん、ごめーさつ！あたしは絵本の九十九神だからね、普通のチョップよりちょっと痛いチョップが放てるのだ！名付けて、えーと…《本の背表紙は地味に痛い》！」　ルビはブックカバーだよ！とか、まな板みたいな胸を張って得意げに痛々「にーちゃん今すごく失礼なこと考えてなかった！？」「地の文に割り込むな！」　何でわかったんだ。　ていうかいくらショボくても妹とのじゃれあいで九十九神の能力を使うなよ…。
そういうことするから喧嘩に高度成長するんだろうが。
「困りました…。私の能力は戦闘向きじゃないし、そもそも怪異が相手では力を発揮できない…」　表情はやはりほとんど変わらないが、全身から悔しさを滲ませる新しい妹。　…つーかさっさと名前付けてーんだけど。　毎回『新しい妹』とか呼ぶの、いい加減面倒になってきた。

「加えて生まれたての体じゃ、素早い動きもそれに対応することもできないもんねぇ～。あたしも経験があるからよく分かるさぁ～」　…んなもん生まれたてのバンビにバタフライナイフ持って挑むようなもんじゃねぇか。　よくそんなどや顔ができるな。　「…しかし、私は諦めません。必ず姉さんを倒し、マスターから名前をもらうんです」

「ふっ、よくぞ言ったわ！それでこそあたしの妹よ！」

お前それ言いたかっただけだろ。

しかしそろそろ止めないと、マジでマジ喧嘩に発展途上だな。なんかこいつら無駄にノリノリだし。　しかし、結果として俺の仲裁は必要なかった。　俺より先に2人を止める声があったからだ。　「いきますよ、姉さん」　「くるがいい！あたしの《本の背表紙は地味に痛い》の餌食にしてくれるわー！」

「お前らいい加減に…」　「『怜悧』」

声の主はジークだった。　謎の呪文を口にしたジークは、少し呆れたような顔をしながら階段を登ってくる。

ていうか『怜悧』って何？　「『頭がよく、りこうなこと（岩波国語辞典）』という意味の単語ですが、今回は彼女の名前です」　言いながらジークは、生まれたばかりの九十九神を指し示す。　瞬間――怜悧と名付けられた少女は、無表情をほんの少し驚愕に染めた。あるいは、怜悧を包む空気が全部絶望に沈んだと言ったほうが正確か？　まぁ何にせよ、その場が（ジーク以外）凍った。

「全く騒がしいと思って来てみれば、何をしているんですか。生まれたなら早く報告してもらわないと、書類が作成できないじゃないですか。ピュアブラックと生活するにはきちんと手続きをしないと違法行為で捕まるんですからね、遊んでないで迅速に…」

途中からは説教ではなく独り言だったのだろう、ぶつぶつ言いながら階段を降りて行くジーク。　なかなか堂に入った母親ぶりである。　さすがは母さんより長く母親をや

ってるだけあるな、口が裂けても言えないけど。言ったら母さんが対抗心を燃やして、結果我が家は台風が通りすぎたみたいな惨状になるからな。いやー家のどこかに盗聴機が仕掛けてあるらしいから、うっかり口を滑らせたら一家総出（　母さん除く　）で大掃除大会決勝戦だからねＨＡＨＡＨＡ。　「……」

……」「……」「……」

…そろそろこの空気を無視出来なくなってきた…。　２人とも時間が止まったみたいに微動だにしない。　何だここ…。

ダッシュで逃げたい。　正しいのはジークなのだが、筋違いとわかっていても恨んでしまう。　空気読めよ…何か九十九神にとって譲れない戦いだったらしいぜ？　お前も九十九神なんだからその辺汲んでやれよ…。　どのくらい固まっていたかはわからないがしばらくして、怜悧が力なく崩れ落ちる。

それを合図にぐみが駆け寄り、怜悧の体を支える。

かなり心配そうだ。　なんだかんだで、誰かを憎んだり妬んだりができないやつなのだ。　「…お姉ちゃん…」　「…うん」　「…うぅ…ぅわぁぁぁ…っ」

「…よしよし、辛かったね」　「…ぅ…っ、ぅう…！」　「今は…泣いてもいいんだよ…『怜悧』」

「うぅ…！うわぁぁぁあぁん！」

…いやしかし、ここまでシリアスになるほどのことなのか？

怜悧って名前、俺は結構いいと思うけど…そういうこっちゃねーんだろうな。　これ以上ここに居ても（　雰囲気の　）邪魔しか出来なさそうだし、下行って麦茶でも飲むか。

そんなことを考えて階段を降りようとすると、むんずと右足首を掴まれた。　見ると、ぐみがジト目で俺を睨めつけながら足首を拘束している。　「何してんだ？」　というか何をするつもりだ。　「…にーちゃんは泣いてる女の子をほっぽってどっか行っちゃうような甲斐性無しなの？」

…その後、俺は２時間に渡って２人の愚痴に付き

合わされた。

◇

「それは何というか…災難だったねぇ」　苦笑いで同意してくれる春風。

1人で背負うより2人…か。確かに春風の同意のおかげでだいぶ楽になった。　そうか…あいつらはこの感じが欲しかったんだな。　これ以上この話を続けると、今度は俺の愚痴が止まらなそうなので、話題を変えることにする。　「しかしすごいよな春風。普通、他人の愚痴なんか聞きたくもねぇだろうに」

「そんなことないよ～。私は、普通。私だって、見返りがほしいから愚痴を聞いてるんだよ？」　「見返りって…。んじゃ俺は何を要求されるんだ？」　聞いたら、春風はずいっと顔を近づけてきた。　どのくらい近くかというと、ちょうどおでこがくっつくくらいの距離。　この女子に人付き合いの距離感は無いのだろうか。　心臓がお祭り騒ぎだ。　「緑野くんは、私が愚痴を聞いて、どうなった？」　「…楽に――――なった」　荷を2人で――――分けたから。　「おけーい！だったら私の望みは叶いました！」　元の位置に戻り、笑顔を咲かせる春風。　少し残念に思った自分はスルーする。

「俺が楽になることが、望み？」　「最初に言ったでしょう？私に背負える荷なら、分けてほしいって」

私はねぇ、友達の幸せが大好物なのですよ！と言って、胸を張る春風。　いつの間にか友達になってた…。

しかしぐみは妹だし胸はまな板だから何とも思わなかったが（机の上の絵本が抗議してきた。ちなみにぐみは、春風が声をかけてきたあたりから元の姿に戻っている）、さっきあんなに顔を近づけた女子がたおやかな胸を張っていると、何というか…うん。

巨乳というわけではないが貧乳というわけでもない、美乳とでも呼ぶべき「何か私の胸にいやらしい視線を感じるんだけど…」

「おやおや、この教室にはずいぶんとぶしつけなやつがいるんだなぁ」いや俺だけど。　女子が視線に敏感っ

て本当だったんだ…春風さんと我が妹のジト目が痛い…（ぐみは絵本に戻ってるからどんな目をしてるか分からないけど、何か刺々しいオーラを放っている）。　しばらく2人のジト目に冷や汗をかいていると、仕切り直すように春風がため息をつく。

「…まぁ、緑野くんもお年頃だもんねぇ。女の子に興味を持ってて当たり前か…」　「え、見ていいの？」　「言ってません」　またジト目。　「その話は流して、えーと怜悧ちゃん？はどこにいるの？」

流された…。　『置いといて』とかだったら食い下がれたのに…。「…緑野くんがやたら悔しそうにしてるんだけど…。男子の友達はいないから知らなかったけど、男の子ってこんなにも女の子の胸が見たいものなの…？」　…うん、冷静になってみると我ながらドン引きだ。　第二の阿良々木暦でも目指すつもりだろうか。　「…アララギって、誰？」　化物語ネタが通じなかった。いや、通じたら通じたで、今度は妹へのセクハラを勘ぐられたかもしれないけれど。　「…あれ、何の話だったっけ？」　「いやだからさ、怜悧ちゃんは今日来てないの？って」　お願いだから話を聞いてよ…と、疲れたようにぼやく春風。　悪ノリが過ぎたか。　「てか来るわけないだろ、生まれたてなんだから」「……？何で生まれたてだと来ないの？人間の赤ちゃんみたいに、まだ歩けなかったり喋れなかったりするわけじゃないでしょう？」　「…学校の授業で何を聞いてたんだ？」　こんなん基本中の基本だぞ。

「…実は、勉強ってあんまり得意じゃないんだよ」　恥ずかしそうに笑いながら、消え入るように呟く春風。

まぁ俺の場合、九十九神と日常生活送ってるから、妖怪学は体感で学んでるようなもんだからな。　妖学は俺の数少ない得意科目だ。　「…えーと、じゃあ、怪異の種類は2つに分けられるのは知ってるよな？」　首を横に振る春風

さん。　…いやさすがにそれはヤバくないか？　「怪異は大きく分けて2種類いる。純血のピュアブラックと、混血のトワイライトだ」　まぁ、怪異に血統なんてほとんどないけど。　分かりやすさ優先だ。　「で、中でもピュアブラックは、人間と暮らすには何かと障害が多いんだ。人を襲う怪異ならまずその設定をどうにかしないとならないし、心への耐性をつけないとならない」　ここで区切り春風の反応を見てみたら、目が泳ぎはじめていた。　…まさかもう限界なのか？　「こ…心への耐性ってなに？」

「怪異が有する様々な能力と同じで、心ってのは人間の持つ『互いを紡ぎ、事象を超越する能力』…簡単に言えば、誰かと仲良くなれて、奇跡を起こすチカラなんだ」

そしてこの力は、怪異にとって毒と変わらない。　「耐性無しで人間の中に放り込めば、心は怪異の存在を喰ってしまう」

「喰うって…。心ってそんな乱暴なものなの？」　「いや、だから言っただろ？本来は『繋がる力』なんだよ」

怪異には、それが出来ないというだけで。　繋がるための心が、無いというだけで。　「一方的な繋がりは、相手の存在を喰ってしまうんだ。例えば虐待を受けた子どもは、それを虐待だと認識しないことがあったり、虐待した親と似たような人を好きになったりするだろ？それは存在が喰われて、自由度が下がるからなんだ」　人間なら、それでも命があるから――――それが果たして幸せなことかは別にして――――存在し続けられるけれど、怪異はそうはいかない。　人間の心から、身を守らなければならない。　「じゃあつまり怜悧ちゃんは、心耐性をつけるための修行に行ってるの？」　「修行ってほど大層なもんじゃないけど…九十九神は例外的に心耐性がある怪異だから、事故防止の講習がメインだな」　ちなみにこの講習も役所への申請同様、法律で義務づけられている。　車の免許を取るのと同じだ。　最近では交通事

故より発生率の高い事故――――妖怪変化。　　闇にあてられた人間が怪異化する現象だ。　　特に心が弱っていて、精神的に儚い人ほど遭いやすい。　　人と怪異の共生に伴うマイナスとして、反体制派の演説に頻出する単語だ。　「そっかー。妖怪と一緒に暮らすって、大変なんだね」

勉強になったよ、と言って、手を降りながら席に戻る春風。　　話に飽きたのかと思ったら、いつの間にか来ていた先生が号令をかけていた。　あわてて起立する俺をよそに、ぐみは絵本のまま沈黙していた。

祭りは始まる前が楽しいと言いますが、ゲームも起動するまでが楽しいのかもし

なんだか寄り道ばかりしている感があるが、どうでもいいことに時間を使い過ぎている感は否めないが、もう少し我慢してほしい。

大丈夫、ゆっくりではあるが、確かに物語は始まりつつある。

もっともこの話の始まりをどこと定義するかは、意見の分かれるところだと思う。　事の中心である（彼女からすれば勝手に中心に据えられたという感じだろうが）春風　薫が体験した何かを始まりとするなら、遅すぎる開幕だ。どんだけ予告ダイジェストを流していたんだという話である。

俺が春風に声をかけられたときや怜悧が生まれた瞬間が始まりだとしても前振りが長すぎるだろう。　では今この瞬間を。

春風の下駄箱から溢れ出た大量の手紙（俺みたいなもんから見たら、５通は大量の部類だ）を発見したこの瞬間を始まりとしてならどうだろう。　「……」　正直、リアクションに困った。　ていうか何だこれ。

春風に人気があることは知っていたけど、５通って。

どう見ても１８歳以下にしか見えない青少年ぐらいはいるだろうけど（決してロリコンなわけではない、テレビと教室で実際に見たことがあるだけだ）、一周回ってもはやギャグみたいにモテるやつまで実在するとは…。

そもそもなぜ俺がこんな場面に立ち合っているかといえば、それはついさっきの出来事に起因する。　どういうわけだか、春風が「一緒に帰ろー！」とか言い出したのだ。　そしてさらにどういうわけか、これにぐみが猛反発した。

「だーめー！！にーちゃんはあたしと一緒に帰るのー！」

「３人で一緒に帰るっていう選択肢もあると思うんだけど…それもだめなの？」「だめだめだめー！！にーちゃんも何か言ってよ！」　「別に俺は構わないけど…何がそんなに嫌なん

だ？」　　そんな一幕を経て、ぐみは絵本バージョンで俺の制服の中に潜りこんでしまった。
　仕方がないから、そのまま春風と下駄箱に向かって今に至るというわけだ。　しかしそこはギャグみたいにモテる女、春風薫さんである。　　俺がリアクションに困っている間にも、慣れた動作で手紙（ていうかぶっちゃけラブレターだろう）を取り出し、慣れた運動でゴミ箱に向かい、慣れた動きで…って！　「ちょっと待てェェェ！！」　流れるような動作でラブレターを捨てやがった！　誰にでも優しいキャラはどこ行った！　「うん？どうかしたの緑野くん」
　さっきまでと変わらない調子で、そう返す春風。
「どうって…今の、は…」「あはは。心配してくれるの？優しいね、ありがとー。でも大丈夫だよ」　…いや。　前言撤回だ。　春風の様子がおかしい。　どこを見ているのかわからない。　俺ではない誰かを見るような、今ではない昔を見るような。　「これは罰で、わたしが背負うべき罪なんだよ。だからへいき。」　今度こそ、わたしがたすけるからね。　輝きを失った焦点の合わない目に俺ではない誰かをうつした春風は、それだけ言って帰ってしまった。　まさかあれはいじめの一環なのかと思い、捨てられた手紙を開封してみてすぐ後悔した。　「…なんか電波全開だったねあの人」　「そーいうことはせめて本人の前で言え」　「言うのはいいんだ…」　捨てられた手紙の執筆者に、勝手に読んだことを心の中で謝りつつ、いつの間にか人間フォームになっていたぐみに発言の訂正を促す。
　この瞬間を物語の始まりだとするなら、それはあまりにも唐突な始まりだった。
◇
「へぇー。この子が淋漓の言ってた新しい妹さん？」「緑野怜悧と申します。以後お見知りおきを」　春風がラブレターを

ダストシュートした日の3日後、教室では研修を終えた怜悧が黒兎と挨拶をしていた。怜悧は相変わらず感情の読めない無表情で、黒兎も相変わらず小学生にしか見えなかった。「いつもの小学生扱いはともかく、相変わらずって単語が出るほど離れてないでしょ」「そうなんだけど、なんか久しぶりな感じがするんだよな」まぁ2話しか間は空いてないのだけれど、いっそ懐かしくさえ思う。「おはよー黒兎くん緑野くん！あっ、この子が怜悧ちゃん？初めまして、春風です！」黒兎と談笑していると、いつもの春風が会話に参戦してきた。しかし3日前の春風を見て以来、俺にはその普段通りな様子さえ異常に見えてくる。

「…初めまして、怜悧です。失礼ですが、マスターとはどういったご関係ですか？」「本当に失礼だな！」うちの妹陣は悪くも悪しくも遠慮が無さすぎる。ただ、その遠慮の無さのおかげで春風が質問攻めにあっているので、この隙に黒兎に、春風の裏の顔…3日前の言動について聞いてみる。家業柄そうなのか、黒兎は学校の噂にやたら詳しいのだ。

「あぁ、その話なら結構有名だよ。少なくとも、告白のために軽く下調べするだけで耳に入るくらいには」「…じゃあのラブレターはなんだったんだ？」嫌いだとわかった上で送るなんて、やっぱりいじめ…？「いやほら、世の中には少し普通じゃない趣味を持ってる人がいるから。そういう人たちが、春風さんが自分の書いた手紙を捨てるのを見て喜ぶための手紙だったんだと思うよ」「……」やっぱりいじめじゃないだろうか。「だからたぶん、そのあと勝手に手紙を見た淋漓も支持率が上がってると思うよ」

「……」やっぱりいじめじゃねーか。「いきなりそんなこと聞いてどうしたの？まさかとは思うけど、淋漓も告白するつもりなの？」

「いや、そーいうわけじゃねーけど…」そこ

から先は続けられなかった。　九十九神シスターズに飛び掛かられたからである。「にーちゃん！今のはどーいうこと！？ちょっと聞き捨てならないよ！」　「彼女の優れた点と私たち姉妹の劣っている点を具体的に教えてください。１週間もあればマスターにご満足して頂ける仕上がりになってみせますから」

「何でもかんでも恋愛に結びつけるな！俺はそういう安易な発想が大嫌いだ！」　結局、飛び掛かってきた愚妹どもを引き剥がす作業のせいで黒兎との会話は打ち止めになった。　妹×２を引き剥がすのに今までの倍以上時間を消費したことを除けば、実にいつも通りな朝だった。

◇

「しかしマスター。真面目な話、彼女は止めておいたほうがいいです」　「うん、あたしも怜悧とおんなじ考えだよ」　「真面目であれ不真面目であれ、その話はもう終わっただろうが。今さら蒸し返すな」

昼休み。　怜悧が加わったことによりぐみの盗み食いは阻止され、久々に落ち着いた食事ができる（ぐみが生まれて以来だ）と思って迎えた昼休みは、怜悧のそんな一言から始まった。　「まぁそう言わずに聞いてください。彼女は人間ですが、どういうわけか微かに妖気を感じるのです」　「妖怪変化の前兆じゃないか！」　怜悧のセリフに、弾かれたように黒兎が反応する。　黒兎は陰陽師の家系で、その仕事は妖怪変化を代表とする怪異関連の事故の対処だ（他にも怪異が起こした事件を解決する仕事があるが、同じ陰陽師でも事件と事故では、いわば部署が違うらしい）。

「しっかしいくら怜悧が怪異だからって、素人に先越されんのはプロとしてどうなんだよ」　「う…そうなんだけど…。っそれより、早く対処してこないと！」　「ち…逃げたか」　まぁ、確かに早く対処しないとまずいのだが。

妖怪変化って深みにはまると、滅するしか（説明するまでもないと思うが、殺すということだ）なくなるらしいし。

黒兎の対処を待つこと3分、一仕事終えたみたいな顔をして、黒兎が戻ってきた。
「よーおかえり。どうだった？」
「何事もなく終わったよ。春風さんも協力的だったし」
達成感に満ちた黒兎の報告に怜悧が首を傾げる。
「…その口ぶりだと、対処に非協力的な人がいるみたいに聞こえます」
「うん、たまにあるんだよ。自分が怪異になりかかっているっていうことが受け入れられなくて、結果的に怪異化が加速しちゃうパターンが」
「そうなのですか？」
「ジジツから目を反らしたダイショーってことだね！」
ぐみがもっともらしい横やりを入れる。
構ってほしかったのだろうか。
「まぁ厳しい言い方をするとそうなるのかな。他にも、対処後に悪化するパターンとかもあるんだよ」
「え、マジで？」
それは知らなかった…というより、それは対処が甘かったってことじゃないのか？
「いや、このパターンは対処の出来に関係なく、対処をしたことが悪化の原因になるんだよ」
「えー？対処って、大丈夫な状態にすることじゃないの？」
「そうなんだけど、手術は大がかりなほど当人への負担が大きいのと同じだよ。妖怪変化っていうのは、人間が暗い感情を溜め込んだときに、その感情を苗床に怪異化することを言うんだけど、これに対処を施すと、抱えた感情が大きいほど心に負担がかかるんだ」
だいぶややこしい話になってきたせいか、ぐみはすでに舟を漕いでいる。
怜悧はそれとは対照的に早く続きをと黒兎を急かす。…兄弟は年下のほうがしっかりした子になりやすいと聞くけど、ここまで顕著なもんなのか？
「いくら対処を施しても、一度芽生えた感情は無かったことにはできない。ちょっとしたきっかけで再燃し、対処を施されて弱った心を一飲みにしてしまう」
結局は、ぐみちゃんの言った通りなのかもね――――と。
黒兎は怪談を締めくくるように、妖しく笑ってそう言った。

その日の昼休みの話題は、黒兎の妖怪豆知識に終始した。

◇

まぁ、ここから先は賢明な読者の皆さまの予想通りだ。

もうバレていると思うので先に言ってしまうが、あの後春風は闇に飲まれ、俺たちは春風が助かるために頑張った。

オチの分かりきった物語を読むのは退屈だろうが、先に述べた通りこの話は喜劇だ。

意気込んで風車に挑む空回りな道化を笑ってくれれば重畳だ。

では、物語を再開しよう。

黒兎と妖怪雑学を語り合い、家に帰ってから初めて兄妹3人で買い物に行ったあの日から。「…あのなぐみ、お前子どもの頃ならまだしもこの歳になってまで兄の腕にぶら下がるな。重いし歩きにくい」

「…え？だめなのですか？」

「ちょっと待て怜悧、何でお前まで空いてるほうの腕を猛禽類のような目で狙っているんだ」

日もすっかり落ち、太陽に変わって街灯が道を照らす時間。

なぜこんな時間に妹を両腕にぶら下げるという一風変わったスポ根な場面が出来上がっているのかといえば、ジークが倒れたからだ。

ジークはTシャツの九十九神で、その能力《過剰な重ね着》（『ルビはアンダーウェアだ』と母さんが得意げに言っていた。ぐみがああなったのは確実に母さんのせいだ）は、着用者として登録した人のダメージを肩代わりするというものだが、家に帰ったらそのジークが文字通りボロ雑巾と化していた。

俺たちはそんな酷い怪我を負う機会はなかったので父さんか母さんか、あるいは両親のダメージを肩代わりした結果なのだろう（あまりのダメージ量に、ジークが人の姿を保てなくなっていた。…俺が車に轢かれたときでもこれほどではなかった）。大慌てで陰陽師に一報を入れた（存在が危うくなった怪異をつなぎ止めるのも彼らの仕事だ）俺たちは、そんな理由から自力で食料を調達しなくてはならなくなったのだ。

とはいえこのパーティーには料理ができる奴がいなかったので、予算の都合からコンビニ弁当を買うことになったというわけだ。
「…しかしジークさん、あんなときでも家の心配をするんですね」
「運ばれる直前まで、洗剤の分量とかご飯代のある場所とかをにーちゃんに教えてたもんねぇ…」
「本当にどこまでお母さんなんだよ…」
そんなことを道々話しながら歩いていたら、突然何かが降ってきた。
「うわぁっ！？」
「……っ！！」
「んなっ…何だぁ！？」
地面はコンクリートで舗装されていたし、それは地面を砕くほどの勢いで降ってきたというわけでもない。
視界は良好だし、街灯だってついている。だから、それが何なのかを俺は視認できていた。
しかし。
それが何なのかを理解する前に、それは俺に狙いを定めて襲いかかる。
「―――ッ！！」
俺が無傷で絶句できたのは秘めた力が解放されて超人的な回避をしたからとかではなく、ぐみが俺に飛び付いて横っ飛びしてくれたからだ。
情けねー兄貴である。
「何こいつ…災害型怪異！？」
「姉さん、落ち着いてよく見てください。でないと私は姉さんをダメな子呼ばわりしなくてはならなくなります」
「…なんか妹からの風あたりが厳しい気がするよぅ…」
「この不安定な妖気、闇を纏った人のような姿…妖怪変化の症状と酷似しています。つまり…」
「あー、なるほど！この人春風さんか！」
やっぱり。
俺は最初にそう思ってしまった。
こいつの目は（　レイニーデビルのような目と言ったら通じるだろうか　）、下駄箱のところで見た春風の目によく似ていた。
「何でその結論に達したのか興味の尽きないところですが、つまりこれは元人間であり、そして…」
「何でってそりゃ、あれだけ露骨に伏線張ってたら誰でもわかるよ～」
「お前そんな根拠どころか違和感とさえ言えないようなことであい

つの正体を断定したのか！？」　俺の同意を返せ。
それとも妹のスペックの低さを考慮しなかった俺が悪いのだろうか…。　余談だが、この楽しいおしゃべりには妖怪変化も暴力枠で参加している。　堕ちたばかりなせいで体が馴染んでないのだろう、実はそんなに速くない。　これぐらいなら、真人間の没個性な俺でも避けられる。　「そんなバカな根拠で人の話の腰を折らないでくださいダメ姉さん」
「ダメ姉さん！？怜悧今あたしのことダメ姉さんって言った！？」
「そんなことはどうでもいいんです。重要なのは、マスターが協力してくだされば、この…人？を人間に戻すことができるということです」　「……」
……。　は？　「俺が！？
何だそのラノベ展開！」　「事実は小説より奇なり、ということです」　「ということですじゃねーよ！！せめて納得のいく説明をしろ！」　「この場にいる人間がマスターだけだからです」　この妖怪変化を助けるにあたって、心の能力が必要なのです――と。　怜悧は、その理由を話しはじめた。　「ざっくり説明しますと、私の能力でマスターをあの…人でいいですよね、あの人の心の中に送り込むことができます。そうしたらあとは、妖怪変化の原因を直に処理することが可能です」　「マジでか！？」
対妖怪変化を生業とする黒兎から見たら反則みたいな能力だ。　と、そのとき。　「う…うぅぅ…っ！」　「お！？喋った！春風さんが喋ったぞにーちゃん！」　「だからダメ姉さん、漫画脳な根拠であの人を春風さんと断定しないでくだ…」「あああぁぁァぁァああアアア！！」
「っいけません…闇が馴染んできています。このままでは陰陽師に通報して滅してもらうしかなくなります！マスター！」
「おう、任せろ！」　こいつが春風であれ見知らぬ誰かであれ、助けられるやつを見捨てるつもりはない。心の中でもどこでも

行ってやる！　「ではまず、マスターはラインを繋いでください！」「……へ？」　ラインって何？
「心には互いを紡ぐ能力があるでしょう？あれであの人の心を繋いでください！」　「いやいやいや無茶を言うなァァァ！！心にそういう能力があるとは言っても使い方がわかんねーんだよ！！」　閃きって自分の意思で起こせる現象じゃねーだろ？それと同じだよ！　「だって自分の心でしょー！？にーちゃん何で使えないのさー！」　「うわっ！？さっきより速えぇ！」　右、左。　襲ってくる妖怪変化の攻撃を避ける。　ラインどころか会話さえ難しくなってきた。　「《本の背表紙って地味に痛い》！」　妖怪変化と俺の間に入り、技名を叫んで一閃する。　しかししょせん本の背表紙で殴った程度のダメージしかないので、相手は全く怯まない。　妖怪変化がぐみとバトルパートに入り、ここぞとばかりに声をあげる怜悧。　「今ですマスター！ラインを繋いでください！」　「だから無理だって！繋ぎかたがわかんねーんだよ！！人間は訓練しなきゃ何もできねーんだ！！生まれた直後に二足歩行して白米を食す赤ん坊がいるか！？」　俺は寡聞にして聞いたことねーぞそんな気色悪い赤ん坊！　「けど、春風さんは友達でしょう？一度ラインを繋いだことがある相手なら、もう一度同じことをすれば…」　「あいつが春風かどうかなんてわからないだろうが！」　ぐみのギャグのせいでなあなあになってたけど、あいつが春風だと決定付けるものは何もないからな！？　「大体友達っつーのも春風が勝手に言ってるだけ…」　…ん？　ちょっと待て…一度繋いだことがある？　要するにラインってのは、相手との繋がりのことなのか？　そういうことなら…そしてあいつが春風なら。　ど素人の俺にも、ラインを繋げる方法があるかもしれない！　「…失敗しても、がっかりするなよ

？」

「私と姉さんは、どんなマスターも大好きです」

「実は人殺しかもしれないぜ？」

「それでも大好きです」「そこは嫌いになってもらいたいんだが…」

リスキーな妹だ。

「それにマスターがそんな殺伐とした人なら、私のダメ姉さんはあんなにふわふわしていません」

「…そーだな」

その通りだ。

俺は大きく息を吸い込み、自分の考えが間違ってないを考える。

重度のお人好しにして、極度のおせっかい。

春風薫と繋がる方法はこれで間違っていないかを考えて———吸い込んだ息を、喉を震わせるために吐き出す。

力強く。

「春風！！今困ってんだ、助けてくれ！！」

瞬間。

俺とあいつの間に、光が弾けた。

「…ありがとうございますマスター。ラインを確保致しました。次は私の番ですね」

怜悧の髪が踊りだす。

それは風が吹き上げるように舞い、やがては光と戯れる。

光の中に１と０の羅列が浮かぶ頃、輝きが強さを増して視界を塗りつぶす。

「…———ゲーム、スタート」

物語がいつ始まったかはわからない。

けれど、俺が事件と呼んだ喜劇は、この瞬間に始まった。

ワールドマップ《ウィンフィール》

あまりの眩さに両目を覆う。　光の世界に生きているはずの人間が輝きに目を閉ざすのなら、闇の世界に生きる怪異にも目をこらす暗闇があるのかな、なんて益体のないことを考えていたら、視界を包む光が弱まってきたのでそれに合わせて少しずつ目をあける。　そこには、どこまでも続くだだっ広い野原があった。

「…なんだこりゃあ…。ここが春風の心の中なのか？」

『いえ、厳密には少し違います』

俺の疑問に、大気が震えて答える。

それは怜悧の声だったけれど、本人がどこにも見当たらない。

「怜悧か？どこにいるんだ？それにここが春風の心じゃないって…じゃあここはどこだ？」

ここは春風の心じゃない…でも。

あの妖怪変化は、間違いなく春風だった。あんな状態になってまで俺の「助けてくれ」発言を真に受けて、力になろうとする馬鹿なんて———春風しかいない。　自分を省みないというか何というか…自分の命さえ、平気で他人のために使ってしまうやつなんだ。　この分だと、あるいは自分のことを殺そうとしたやつの弁護をしたという噂も嘘じゃないのかもしれない。

『はい、ここは春風さんとマスターの命を基盤に春風さんの心で創り上げた私の能力空間です』

「人の命をなんだと思っているんだ！！」　俺の命を勝手に使うなや！いや春風のもだけど！　あいつのこと言えない…俺が他人のために命を使うやつになってしまった。　『私の能力は本来、対象を私の中に捕らえるだけの能力です。鏡の怪異に多い能力ですね。しかし私は鏡と違い、プログラムを少しいじればその性質を変えられます』

「性質を変える？どういうことだ？」

『簡単にいうと、条件を満たせば怪異に

魅せられた人を助ける能力として使用できるということです』
　怜悧が俺の質問に簡単に答えると、空間に淡く輝く文字が浮かび上がる。
◇脱出条件　　◇死亡条件
ラスボスの撃破　　敵に殺される
「死亡条件って何だァァァ！！え！？敵って何！？しかも殺しにくるの！？おまけにラスボスとか、ＲＰＧ気分ですかコノヤロー！」
『はい、これはマスターを主人公としたＲＰＧです』　正解だった！　「いや待てェェェ！！俺は喧嘩さえしたことがねーんだぞ！それがいきなりＲＰＧでファンタジーな冒険できるワケねーだろ！サファリパークにハムスターを放り出したようなもんだよ！」『大丈夫です。戦闘はプレイヤーがコマンドを選べば、プログラムがマスターの動きを最適化しますので、通常の３倍のステータスで行動できます』　…ロボットアニメの金字塔で有名ななワードだけど、どこで覚えたんだ？　俺は教えてねーぞ。　「ちなみに、そのコマンドって誰が選ぶんだ？」　『…それは…』　『はいはーい！あたしあたし！あたしがプレイヤーだよ！』　「デッドエンド確定じゃねーか！！ご愛読ありがとうございましたー！」　『何であたしがプレイヤーだとデッドエンドなの！？大丈夫だよ、俺たちの冒険はこれからだー！だよ！』　「それただの打ち切りィィィ！！おい怜悧大丈夫なのかこれ！？俺生きて帰れんのか！？」
『正直私も不安なのですが、私はゲーム機本体ですのでプレイヤーにはなれません。他に誰もいないので、申し訳ありませんが我慢してください』　『うぅ…にーちゃんと妹がいじめるよぅ…』　俺の後ろの大きな窓（　おそらく怜悧改めＰＳＰの画面なのだろう　）から見えるぐみがいじけた。
　それは無視して、何とか自分の意思で動けないかと怜悧に聞いてみる。　『…申し訳ありません。マスターは今、いわばフリーズした状態なのです。心の中に別の心が侵入してくることは受け入

れ難いものらしく、今現在もすごい力で拒絶されています。例えて言うなら、ここは台風の暴風域のようなもので、この空間に存在し続けること自体が難しいんです』　「……」

めっちゃ嫌われているということらしい。　人の心に不法侵入しているのだから当たり前なのだけれど、軽くショックだ…。

『なのでマスターの命は基盤に使用し、心は私…つまりゲーム機本体のプログラムと癒着させることでマスターの存在をこの世界に縛り、外部入力で動くように設定しました』

「なるほどねぇ…」　うまい例えは見つからないけど、話を聞く限りかなり無理矢理侵入しているらしい。

「話をまとめると、この世界はつまりお前がロードしたゲームで、俺が主人公、ぐみがプレイヤー。メインの素材は春風の心だから、俺たちがゲームをクリアすれば春風は元に戻る…そういうことだな？」　『その通りです』　ふむ。そしてプレイヤーの協力無しにはクリアできないと。もどかしいな…RPGの主人公はこんな気分なのだろうか。　となると、今やるべきことはぐみの機嫌をとってゲームをやってもらうことか。

さてどうするかと考え始めた頃。

↓てきがあらわれた！　「はァァァ！？何でェェェ！？まだ一歩も動いてねーぞ！？」　『まぁ、便宜上ゲームに例えましたが、ここは春風さんの心の中ですからね。体内に雑菌が侵入すれば、白血球が群がるのは当然です』

「俺は雑菌ですかそうですか！！」

この妹は兄が嫌いなのだろうか。　泣き出したい衝動を抑え、ぐみに協力を要請する。「ぐみィィィ！！にーちゃんが大ピンチだ！助けてくれェェェ！！」　情けないとか気にならない、こっちは切実に命が危ないんだ！いや正確には心が危ないか？どっちも変わらん分からないなら一度誰かに襲われてみろ！　『…もう、いじめない？』　若干幼児退行した様子のぐみが涙目で聞いてくる。　俺としては襲われる恐怖でいっ

ぱいいっぱいなので、ぐみの発言をよく聞きもしないで全肯定する。
「あぁいじめない！だから助けてくれ！」　『…ぐみのこと、あいしてる？』　「あぁあいしてる！だから助けてくれ！」　『…終わったら、ちゅーしてくれる？』
「あぁちゅーしてやる！だから助け…」
…あれ？何か今、俺結構アウトなこと言ってたような…。
『わーい！えへへっ、約束だよ！』
切羽詰まっていたから自分が何を言ったか覚えてないが、どうやらぐみの機嫌はなおったようだ。代わりに倫理観を失った気がするが、たぶん気のせいだろう。　『…マスター、私にはして頂けないのですか？』　「へ？何を？」
『とぼけないでください。私だって春風さん救出に貢献しているのに、姉さんにだけご褒美があるなんてずるいです。対等の報酬を要求します』　「報酬って…」　まぁ覚えてないとはいえ、ぐみには何かご褒美を約束してしまったらしいし、あの春風さえ自分の親切に見返りを求めるんだ。　報酬の要求は正当な権利か。　「いいよ、わかった。対等って言ってたけど、ぐみと同じ内容でいいか？」　約束の中身を覚えてないから、何が対等か分からないし。
『いえむしろそれでお願いします。絶対ですよ約束ですよ』
「わかったって」　どんだけ念を押すんだよ。反故にされる恐れのある願いってわけでもなかろうに。
とにかく、何故か法律を敵に回した気がするけどぐみが復帰した。これで戦える！　「……」
↓昆布大好きAがあらわれた！　↓昆布大好きBがあらわれた！　『わー、かーいいねー。デフォルメ春風さんが美味しそうに昆布食べてるー！』「戦えるかァァァ！！」　無理無理無理！俺にはあんな幸せそうな顔で昆布を楽しむデフォルメ春風は攻撃できない！
『ふっふっふっ、何も知らずに呑気なものよのぅ…。あたし

のにーちゃんの力、とくと見よー！』　「見せなくていいよ！怜悧、お前からも何か言ってやってくれ！」　『マスターは姉さんだけのものじゃありません』　「そこじゃね…」　どうぐ　↓たたかう　〜ピッ　まほう　にげる　「ぎゃあああああ！！」　やりやがった！　あいつマジでやりやがった！　↓昆布大好きAは美味しそうに昆布を食べている！　↓昆布大好きBは幸せそうに昆布を楽しんでいる！　「嘘だろ…俺これからあんな無垢なやつを攻撃するの！？マジで！？」　『いけーっにーちゃーん！』　↓りんりのこうげき！　がつっ！　「生々しい！殴った感触がすごく生々しい！」　↓昆布大好きBに43のダメージ！　↓昆布大好きBをたおした！　「昆布大好きBィィィ！！」　罪悪感で死ねそうだ！　↓昆布大好きAはげんじつにおいつけないでいる！　「反応がリアルなんだけど！これ端から見たら俺雛見沢症候群の発症者じゃねーか！」　『ひぁーういごー！』　↓たたかう　〜ピッ　まほう　どうぐ　にげる　「あれを見た上でのたたかうコマンド！？お前は鬼か！！」　『違うよー！あたしは、九十九神だよっ！』　「嘘だッッッッ！！！！！」　『またひぐらしですかマスター』　↓昆布大好きAは昆布大好きBのからだをゆすった！↓へんじがない…ただのしかばねのようだ。　「やめろォォォ！！そんなリアルな反応をするなァァァ！！殺人鬼になったような錯覚を覚えるだろうが！！」　↓りんりのこうげき！　がつんっ！　↓クリティカルヒット！　昆布大好きAに57のダメージ！　↓昆布大好きAをたおした！　「昆布大好きAェェェ！！」　『やった勝ったー！』　「あれに勝って嬉しいかチクショー！」　昆布大好き（ちなみに敵

の名前だ　）たちを殴った感触が生々しく両手にまとわりつく。
ゲームをクリアするまで、人間でいられる自信がなくなってきた…。　「怜悧…あれは本当に俺に追い出しにきた白血球なのか…？」　『そうは言っても春風さんの感情ですからね、彼女たちは。戦闘の概念自体がないのかもしれません』　「ちょっと待てェェェ！！え！？あれ春風の感情！？」　じゃあ俺は、春風の昆布大好きという感情を殺したということか…！？　シャレにならねーぞそれ！
『大丈夫です。感情はそんなに簡単には死にません。心のない私たち怪異にさえあるものですし、眠ることはあっても死ぬことはないです』　「お前が言うと信憑性が薄れるな…」　いつも無表情だし。　けどまぁ、妹の言うことを疑う兄ではない。怜悧の話を信じよう。
…べ、別にあの2人は眠っているだけだと信じたいわけじゃないからな！　『おー！やったー！アイテムだー！経験値少なかったけど、アイテムくれたから許す！』　「許す許さないはお前が決めることじゃねーだろ」　どちらかといえば被害者が加害者に対して言うセリフだ。　「じゃあ、先を急ごうぜ。あんなのと戦ってたら心がいくつあっても足らねーよ」
『ふぅ…我が兄ながら情けないにーちゃんだぜ』　「いっぺん無実の人間を虐殺してから言いやがれ」　『本当は一度でもやってはいけませんけれどね』　「お前が俺を放り込んだんでしょうが！」　春風を戻すためには仕方がなかったとはいえ、やっぱり不満は拭えない。だって、あいつらに罪はなかったじゃないか！　『あ！』　「あ？」　↓てきがあらわれた！　「出たァァァァァァァ！！」　『いよぉっし！かかってこーい！』
「逃げろお前らァァァ！！」↓お人好しAがあらわれた！
↓お人好しBがあらわれた！
「これ普通に春風じゃねーか！服装がファンタジー仕様なこと以

外何の違和感もなく春風だよ！」　『う…確かにこれを攻撃するのは気が引けるねぇ…』「そうだろ！？悪いことは言わねぇ、今すぐ逃げよう！」　よかった…！ぐみにも知り合いへの攻撃を躊躇う程度の良識が残っていたことも含めて！

↓たたかう　〰ピッ　まほう

どうぐ　にげる　『悲しいけど…これ、戦争なのよね』　「こんな場面でお前が言うなァァァ！！」　さっきまでの俺の感動を返せ！

↓お人好しAはニコニコと笑っている！

↓お人好しBは興味津々のようだ！　↓りんりのこうげき！　がつっ！　↓お人好しAに45のダメージ！　↓お人好しAをたおした！「お人好しAェェェ！！」　↓お人好しBのひょうじょうがきょうふにそまる！　ちきしょう…またなのか！？また俺は同じ過ちを繰り返すのかよ！運命の袋小路からは逃れられないっていうのか！？

『マスター、ひぐらしネタ使いすぎじゃないですか？』　うるさいだまれ何でひぐらしってわかるんだよ。　『マスターが私を机の上に放置して熟読していたマンガですから』　「……」『姉さんがいないときとかは音読もしてましたし』　「今言わなくてもいいだろ！？」

↓たたかう　〰ピッ　まほう

どうぐ　にげる　「△※？？†？彳？？？！！（　声にならない悲鳴　）」　『…あたし以外の書物を音読した兄ちゃんが悪いんだよ』

いつもそうだけど、何で音読が浮気みたいな扱いになってんの！？書物（　絵本　）の九十九神だからか！？書物（　絵本　）の九十九神の世界観では音読が浮気なのか！誰が妹と付き合うかボケェェェ！！

↓お人好しBはなにかをけついした！　↓お人好しBはほほえみ、りょううでをひろげた！　「ん？何だありゃあ…」　『もしやカウンター攻撃では…？マ

スター、気をつけてください』　　「カウンター…。はは
っ、そうか、戦う気になってくれたか…」　　『相手に
攻撃されて安心しないでください』　　「そりゃ安心もするだ
ろ。ファンタジー春風が戦ってくれるおかげで、俺の罪悪感が和ら
ぐんだ」　　ただ、なぜだろう…ひぐらしファンの第六感が
警報を打ち鳴らしている…。　↓りんりのこうげき！　↓カウン
ターはつどう！　「いよっしゃキターー！」『攻撃されて喜ばない
でよ…』　　↓お人好しBはやさしくほほえみセ
リフをはなった！「へ…セリフ？」　　お人好しBは、俺の
攻撃を避けようともせず、両腕を広げたまま優しい微笑みを俺に向
けて　　『だいじょうぶ。わたしはあなたをいじめないよ』
がつっ。　　「アレンジ入ってるぅぅぅ！！」
絶望した！　　あんなに優しい女子
を殴って開口一番が「アレンジ」な自分に絶望した！　　てか春
風もひぐらし知ってるのかな…元に戻ったら聞いてみよう。
↓お人好しBに49のダメージ！　　↓お人
好しBをたおした！「もう…涙も枯れ果てた」『にーちゃん、ちょ
っと見ないうちに影が似合うようになったねー』　　テキ
トーなことを言うな。　　ほとんど実行犯じ
ゃねーか。　　『んー、やっぱり経験値が少ない
なー…。あと何体倒せばレベル上がるんだろ』「ちょっと待て！お
前まさか俺のレベルなんかのために、無垢で無実な春風を無慈悲に
も殺すつもりか！？」『だって、レベル低いとあとの戦闘がめんど
いし…』　RPGってそういうものだと思うんだけど…とか。「い
やっ…低レベルクリアっつーチャレンジもあるだろう！？」
『めんどいからヤダー』　「それ言ったら、あいつらだ
ってたいした経験値くれないんだろ！？だったら先に進んでそこで
レベル上げすれば…」　　↓てきがあらわれた！
「ぐぎゃァァァァァ！！」『なんだか、マスターのほうがモンス
ターっぽくなってきましたね』　　「ほっとけチキショー！

そんなとか。

感じで一通り修羅の道を歩いた後、俺たちは最初の町に訪れた。

町の名前は、ペルソナタウン。

！」

最初の町《ペルソナタウン》→異常の中の異変

『いやぁーでも面白いよねぇー…この町の人って、1人残らず春風さんなんだよ！』
「仮面の町…か」
『春風さんの表層…私たちもよく知る、普段の春風さんの部分ですね』
『無視しないでよー！泣いちゃうよー！？』
「ネーミングがあざといっつーか、露骨だよな。」
『そうですね』
『あたし的には、2人の無視のほうが露骨だよぅ…』
町に入り、教会に行って懺悔をした後、春風だらけの町でなぜかテンションがうなぎ登りのぐみをなだめた後、宿屋で一息ついたところで、俺と怜悧はそんなことを話した。
俺たちと話していた春風は、どこまでが建前だったのだろう…。そんなことを勝手に考え、勝手にテンションを下げているところだった。
『まーそんなこと考えても仕方ないよ！それより、装備を整えに行くよ！ここから先の敵も攻撃してこないとも限らないし！』
「それもそうだが…」
このまま戦い続けていたら、いつか本当に人間味を失いそうで怖い。
さっきはギャグで流されたけど、無抵抗の敵…敵でさえない相手を一方的に傷付けるのは、かなり気分が悪い。
だからだろう、心が少しずつ鈍くなっている。
何かを感じることを———放棄しつつある。
『…あたしのせい？』
画面越しに、不安そうな瞳を向けてくるぐみ。心配してくれているのか、一応は自分が悪いと思っているのか。なんて、言うまでも

なく両方だろう。
「いや…お前は、まぁそんなに悪くない。俺が、お前の選んだコマンドに従わなければよかったんだから」
あのコマンドは、選んだ行動が最適化されるというだけで、選んだコマンド以外の行動ができなくなるわけじゃない。
戦闘中は、基本的には自由なのだ。
『だったら何で攻撃したの？』
『あの戦闘においてマスターの行動が、最適化された《たたかう》コマンドでも後攻だったことを覚えていますか？』
『えーと…そうだったかも』
『つまり、素早さにおいて絶対的にこちらが遅れをとっているのです、素早さだけに。最適化されたコマンドでそれなのに、選ばれていない《にげる》コマンドの行動をしても…』
逃げられない。
戦闘は終わらない。
「だから弱らせたら逃げてくれるかもって思ったんだが、そうすると今度は俺があいつらより圧倒的に強い。相対的に、あいつらが弱いとも言えるが…」
『その両方でしょうね。彼女らは、戦闘を前提としていなかったようですし…』
『…そうだったんだ…わかったよ』
「？わかったって何が…」
『次の戦闘からは…《まほう》コマンドを選ぶことにする！』
「本当に何が『わかった』んだ！？」
『だって《たたかう》だとにーちゃんが強すぎるんだよね？だったら他のコマンドを選べばにーちゃんは弱体化して、あの子たちが生き残れるかもしれない』
「戦わずに逃げるという選択肢はないんだな…」
意地でも戦うつもりか。
『それでもし相手が逃げなかったら《たたかう》でいいよねっ！』

「戦わずに逃げろ！！俺がどうなってもいいのか！！」
人類史上なかなか類を見ない、自分を人質に要求を通すというチャレンジをするＲＰＧの主人公だった。
いや俺なんだけど。
さすがにこれは冗談だが（ 他人事みたいに『お好きなように』と言われて終わりだろう ）、彼女らと戦いたくないのは本気の本音だ。ここはゼリー辺りをエサに『にーちゃんが人質じゃ仕方ないね…』「要求が通っただと！？」する必要はなかったらしい。
うちの妹は春風の次くらいに優しい心の持ち主だった。怪異だから簡易タイプの心だけど。
俺を気遣える心があるなら何であの時たたかうのコマンドを選んだんだ…。
しばらくネチネチと恨むからな。
『まぁでも、装備は整えておこうよ。さっきも言ったけど、会う敵みんながあの子たちみたいに大人しいわけじゃないだろうし』
「確かにそうだな」
いくら何でもボスまであんなんじゃダメだろう。
ゲーム的っつーか、人間的に。
優しさ以外の感情が無いようでは、それはもう感情自体が無いのと大差ない。
『さすがに言い過ぎだと思いますが、概ねその通りだと私も思います』
『話はまとまったね！それじゃまず武器屋に行こっか！』
「戦う気満々か！」
効果音が《がつんっ！》から《ざくっ！》に変わることになるみたいだ。
『もちろん防具も買うよー！レベル上げのときにいっぱいお金もたまったし！』
「……」
俺はこれからどうやら、再び自分の良心と戦わねばならぬらしい。

◇

『いやー買った買った！バリバリ買った！アクセサリまで買っちゃったよー！』
「代わりに俺の良識がごりごりすり減ったけどなぁ！」
諸君らに伝わっているだろうか…抵抗も対抗も出来ずに、無垢だったあいつらを一方的にぶちのめしてぶんどった金で買い物をすることの罪悪感が。
かつあげどころか傷害強盗だ。
『装備品からしてそんな感じですしね…。姉さん、何でこの装備を選んだんですか？』
『え？かっこよくない？』
「……」
武器→釘バット
頭防具→ニット帽
足防具→スニーカー
アクセサリ1→グラサン
アクセサリ2→マスク
……。
「ただの不審者キットじゃねーかァァァ！！」
『コーディネートに悪意を感じますね…。姉さん、分かっててやってません？』
『はてさてナンノコトヤラ？』
「……」
ぜってーわざとだ。
何か日頃の恨み的なオーラを感じるけど、心当たりがない。
『あとは道具屋に行って終わりだね』
「嫌だ」
『もー！まだごーとーしょーがいがどーとか言ってるの！？これは

ただのＲＰＧなんだよ！』
「無論あいつらからぶんどったお金を使うのも嫌だけど、何よりアイテムを買うのが嫌なんだよ」
『しかし、マスターは現在回復系の魔法を習得していません。舞台が敵との連戦が前提のＲＰＧである以上、回復アイテムはそれなりに所持しておくべきかと』
「その回復アイテムが嫌なんだろうが！」
皆さんは覚えているだろうか…。昆布大好きと最初に戦ったとき、彼女らがアイテムを落としていた（　正しく言えば『ぶんどった』なのだろうけれど　）ことを。
後で確認してみたら、それは回復アイテムだったのだ。
名称は乾燥昆布。
…だから何で春風は何にでも昆布を持ち出すんだよ。こっちはもう見たくもねーんだよ。
昆布弁当のせいで、あれ以来若干トラウマなんだよね。
『そんなぜーたく、言ってられないでしょう！？にーちゃんはゲームオーバーと昆布祭り、どっちが嫌なの！？』
「そりゃゲームオーバーだけど…って待て！！祭りって何だ！？場合によっては俺はゲームオーバーの方を選ぶぞ！」
『んじゃ！話もまとまったところで、ひぁーうぃごー！』
「くっ…足が勝手に…！だから祭りって何だァァァ！！」
俺の叫びを無視するように、マップ移動の主導権を握るぐみは道具屋に向けてアナログパッドを傾ける。
ホント、それぞれの主導権が逆だったら良かったのに。

◇

『商人タイプの春風さんって、何だかハキハキしてるっていうかサバサバしてるっていうか…イメージがだいぶ違うよねぇ』
「マジかよ…店頭に昆布弁当とか並んでやがったぞ…！？てことは

つまり、先に進めば進むほどにあの悪夢は再現されていくのか！？」
『…姉さん、貴女があんなに昆…回復アイテムを買い込んだせいで、マスターのトラウマがフラッシュバックしているみたいなのですが』
『さって！準備もできたし、次は次の目的地をこの町で調べるんだろうけど…』
『無視ですか。さっきのコーディネートのことといい、姉さんは本当にマスターが好きなのですか？』
「いや待て…回復アイテムってことは、終盤はダメージを受ける度にあの昆布弁当を…！？だとしたらこれはもう悪夢どころの騒ぎじゃねぇ…！世界を滅ぼす災厄、カタストロフだァァァ！！」
『にーちゃん、あんまうるさいと今すぐ昆布使うよ？』
「……」
『姉さん、実はマスターのこと嫌いなんじゃ…』
『…怜悧もそのうち分かるよ…。何を言ってもごっこ遊びとして処理される無念がどれほどの…』
『…こういうときは何と言って慰めればいいのでしょう…。私が同じ人のことをお慕いしている以上、この問題は他人事ではありません…』
「……ん？どうした2人とも。何かあったのか？」
トラウマスイッチから生還したら、妹2人がお通夜みたいな空気に沈んでいた。俺が昆布に怯えている間に何があったんだ。
『『別に』』
「……」
すげぇ目で睨まれた。
まるで、事の張本人が無自覚なことを責めるかのような目付きである（　怜悧の目は無論わからないが、そんな感じの雰囲気が辺りに立ち込めている　）。
俺に心当たりは無いので、もちろん比喩だが。
「それで、買い物の次はどうするんだ？俺は正直、この町に長居し

たくないんだが…」
『この世界はゲームと同じようにプログラムしてあります。なのでこの町のどこかに、ストーリーを進行させるイベントがあるはずですので…』
『つまり、片っぱしから話しかけたらいいんだね！』
「嫌だ」
『もー、にーちゃんは嫌って言ってばかりじゃない！好き嫌いする子は、大きくなれませんよ！』
『何ですかその母親キャラ』
「だってお前、町人全員春風だぞ！？軒先で日向ぼっこしてるじいちゃんも道で遊ぶ子供たちも！老若男女１人残らず春風なんだぞ！さすがに気持ち悪いんだよ！」
春風の顔立ちは悪くない。むしろ整った顔立ちをしている。黒兎が言っていたようなアブノーマルではない、普通のファンのほうが多いのだ（だからこそ俺は、あの日下駄箱に入っていたラブレターにあんな歪んだ願望が込められていたことが分からなかった…というか知らなかったのだ）。
しかし同じ顔が町単位で群がっていれば、どんなに良い顔立ちであろうと気味が悪い。
服装ぐらいしか違いがねーもん。性別を分けるのも体つきの違いではなく、ズボンかスカートかの違いなんだぜ？
春風がってわけじゃなく、この町がキモい。
『そうは言っても、見分けがつかないからこそ、手当たり次第くらいしか手段がありません。早くこの町から出るためにも、どうか…』
「くっ…仕方がない、か…」
でもなぁ…不気味なんだよなぁ…。
ゲームの世界って設定だからか、みんな動きが機械的だし。
…考えちゃいけないのは分かってるし実行に移すつもりもないけど、道行く春風のスカートを捲ったりとかって『やったらにーちゃんのことは発情期って呼ぶ』『そういうことは私たちでやってくだ

さい』「地の文を読むな！冗談だよ仕方ないだろ男ならみんな考えるんだってやらねーよ！」出来たとしてもやったら社会的に殺されるみたいなので忘れよう、そうしよう。
「…気を取り直して、手始めに村長の家みたいのを探すか。町だから町長とか王様か？」
『逃げられましたか、まぁいいでしょう、取り直してあげます。私も、マスターの仰る辺りが妥当かと思います』
『…次からは許さないからね。じゃあまず、それっぽい建物を探そっか』
そう言ってぐみがアナログパッドを傾けたとき。
「…待てぐみ。予定変更だ、何も探さなくていい」
『何で？…まさか』
「あぁ…間違いねぇ」
『ストーリーの進行とか丸投げにしてセクハラの限りを尽くすつもり！？』
『そうなのですかマスター！？』
「違ェェェよ！おかしなモンを見つけたんだよ！」
お前らは自分たちの兄貴を何だと思ってるんだ！
普通にへこむだろうが！
『おかしなもの、ですか？』
「ん、あぁ…。春風以外の誰かだ」
そいつは。
春風の2倍はあるロングの髪をなびかせ、そこにたたずんでいた。

最初の町《ペルソナタウン》→無力なる者の懺悔

春風の親切さを異常と評するなら、彼女はその存在が超常的だった。

達観したような穏やかな目に、膝裏のあたりにまで伸びた髪。

俺と同じくらいの身長は、春風の町の中では一際高く見える（頭の高さが均一なのも、この町の気持ち悪さの要因だ。工場で生産された人間を見てる気分になる）。

彼女がこの世界の何かであることが分かっているのに、俺は声をかけることを躊躇してしまう。

見るもの全てを圧倒するような儚い美しさを、彼女の横顔は湛えていた。

…まぁ、いくら俺が圧倒されようと、マップ上での主導権はぐみにあるわけで、結果として俺は何の躊躇も躊躇いもなく声をかけたのだけど。

「あっ、えーっと…」

しかし口を開くのは俺であり、何を話すか決めるのも俺の仕事だ。

心の準備もないままに話しかけたので、何を話せばいいのか分からない。

自慢じゃないが、女子に自分から声をかけた回数なんて、片手があればカウント出来るくらいだからな！

「いやぁぁぁぁぁ！？」

「痛ぁぁぁぁぁ！？」

殴られた。

凄い速さで殴られた。

「な…何こいつ…まさか、この訳の分からない世界の親玉！？」

しかも盛大に壮大な勘違いをされた。

てか訳の分からない世界って。お前このゲームのキャラじゃねーのかよ。

「とりあえず、まずは手足を千切って…」
「とりあえずで他人の手足を千切るな！！」
誰だこいつのことを「儚い美しさを湛えた少女」と評した奴は！！野生の動物より猟奇的じゃねーか！！
「待てって、別にラスボスでも不審者でもねーよ」
「……」
めっちゃ白い目で見られた。
明らかに疑っている。
今にも「その格好でよくそんな白々しいことが言えるよね」とか言い「その格好でよくそんな白々しいことが言えるよね」やがったしかも一字一句全く違わずに。
「おいおいそいつは聞き捨てならねーな。俺の格好のどこが不審者なんだよ」
「ニット帽を被ってマスクとサングラスを着けた人が釘バットを装備していたら、それは不審者と言っていいと思うけど…」
「……」
仰る通りで。
そういや、ぐみの悪意あるコーディネートのせいで、俺は今不審者なんだった…。
背面の窓を睨み付ける。
ぐみは目を反らし、吹けもしない口笛を吹いて知らん顔をしている。
…後で覚えてろよてめー。
「ちょっと！空を仰ぎ見て誤魔化さないでよ。結局、あなたは何なの？」
「え？いや、空じゃなくて画面の向こうの妹をだな…」
「……」
今度は「この人あれだ、頭怪我しちゃった人だ…」みたいな目で見「この人あれだ、頭怪我しちゃった人だ…」るだけではあきたらず直接声に出しやがった。

止めろよ、傷付くじゃねーか。
「まぁそれはさておき、道を聞きたいんだ」
「よくこの流れで道が聞けるわね…」
見知らぬ誰かは大きく溜め息をついた後、「それで、どこに行きたいの？」と聞き返してくれる。
ありがたいけどあれだな、この女子からは苦労人の気配がするな。
「この近くに洞窟とか森とかない？最近様子がおかしいとかって話があるとなお良いんだけど」
「それなら町の大通りを真っ直ぐ行くと洞窟があるわよ。そこに関して様子がおかしいって話は聞かないけど、そこに関して話す町の人の様子はおかしいわね。どうもあの洞窟、『なかったこと』にされてる感じがするっていうか…」
…教えてもらっておいて何だけど、さっきまで不審者と呼んでいた奴を相手にこうも色々と喋っていいのだろうか。
相談相手には不向きだな。
「…しかし、なるほど」
おそらくその洞窟で当たりだろう。
この町で『なかったこと』にされているということは、俺たちの知っている春風が『なかったこと』にした何かが、その洞窟にはあるはずだ。
「でも、あんなところに何しに行くの？それにあそこ、町の人が入り口を固めてて中には入れないよ？」
「…マジ？」
「マジマジ」
またぞろバトル展開かぁ…。
嫌だなぁ…。今の俺がバトったら完璧にアンダーグラウンドの仲間入りだよ（ビジュアル的に）。
「まぁ、大した用じゃねーよ。うん、ホント何でもねーから。じゃ、道教えてくれてありがとな！」
「……」

◇

「…だから何でもねーってばよ」
「その格好で『てばよ』とか言わないで」
すげぇ目で睨まれた。
ナルトが好きなのか…つーか何でゲームのキャラにそんなプロフィールがあるんだよ。
このゲームは春風の心が素材なんだから、春風が好きだってことかな。
「町で『なかったこと』にされた洞窟に不審者がやってくるなんて、事件の匂いがするじゃない」
「うーん…」
不審者がやってきたんじゃなくて、やってきて不審者になったんだけどなぁ…。結果だけ見れば、怪しまれて当然か。
「あんたが洞窟に訪れる正当な理由を教えてくれたら、私もあんたに構わないのだけれど」
「…理由ねぇ…」
言っても納得しねぇだろうなぁ…。
ゲームのキャラでなくても「現実の知り合いの妖怪変化をどうにかするための手掛かりがあるかもしれないから」とか言われたら、最初に感じるのは憐憫だろう。
また頭の痛い子扱いされるのは嫌だ。
と、いうわけで。
「囚われの女子を助「ダウト」速えーよせめて最後まで言わせろ！！」
まさかの支持率０％だった。
くそぅ、一体なぜ信用してもらえないんだ。
「まぁ、仮に女の子を助けに行くっていうのが本当だったとして、その格好の男の子に助けられる身にもなりなさいよ…。不審者が恩

人とか、不登校確定もののトラウマよ」
「…そこまで酷い？」
「それぐらい酷い」　マジかー…。
何だよ良いこと一つもねーじゃん不審者装備。
「むしろどんなメリットがあると思っていたのよ…」
「しゃーねーな…。おーいぐみ！防具類だけでも元に戻してくれねーか？」
『ふゅー♪』
…いや、だから吹けねーなら止めろよ。正直見ていて痛々しいんだよ。
つーかお前、今のが今回最初のセリフじゃね？
初セリフが『ふゅー♪』ってどーよ。
『…ところでマスター』
「ん？あぁ、そういや…うん、何でもねーや、どうした怜悧？」
『何でもなくないですよね今完全に私のこと忘れてましたよね』
「えーと、それよりどうしたんだよ、ところで何なんだ？」
『流さないでください逸らさないでください今はそっちよりこっちのほうが優先事項です』
「…いや冗談だよ、落ち着け。悪かったよ俺が悪かった」
『ではマスターにお詫びを要求してもいいですか？』
「良心的な範囲ならいいけど…それよりお前、俺に何か伝えたいことがあったんじゃないのか？」
『いえ、別に見知らぬ誰かが「うわ…電波系って初めて見た…」みたいな目でマスターを見ていたというだけです。そんなことより、お詫びというなら今度の日曜日に、買い物に付き合って下さいませんか？』
『あーっ怜悧ばっかりずるいよ！じゃああたしその次ねー！』
「……」
「……」
見知らぬ誰かが物凄く悲しそうな目で俺を見ている…。

そういやこの女子には画面窓が見えてねーんだから、そこに向かって話しかけたら完全に電波系として認識されてしまうことくらい、少し考えたら分かりそうなものなのに…。
「いや…待て、これはその…！」
慌てて弁解を試みる俺だが、見知らぬ誰かの人差し指が、それを遮る。
そして彼女は、聖母のように優しい微笑を浮かべ、まるで子供をあやす母親のように暖かな眼差しを俺に向け、口を開く。
「大丈夫。それでも私は、あなたの味方だよ」
「何一つ大丈夫じゃねェェェ！！」
その後、とりあえず怜悧に2人と会話するための専用回線を繋いでもらった。

◇

「この洞窟には入れません。お引き取りください」
「ほら、だから言ったでしょう？この洞窟には入れないって。ねぇ、聞いてるの？」
もちろん聞いている。
しかし、残念ながらそれどころではない。
今文字通り俺の目の前には、文字通り2つの選択肢が提示されているのだ。
『にーちゃん、どっちにするか早く決めてよー』
『この選択肢は時間制限付きのようです。あまりゆっくりとは考えられませんよ？』
わかってる、早く決めなければ時間切れになることくらい。ただ、どうだろう。この選択肢は、案外その時間切れが正しい回答のような気がするのだ。
だって。
「この洞窟には入れません。お引き取りください」

↓・邪魔をするなら容赦し　ないぞ

・お望みとあらば靴の裏　も舐めます

「選択肢に悪意を感じるぅぅぅ！！」

「……」

見知らぬ誰かに「また発作か…」みた「また発作か…」いって早えーよそして何で毎回一語一句同じなんだよ。実はこいつ俺の心を読んでんじゃねーだろうな…。

そういや、この女子の名前まだ聞いてねーや。

『もー！決めないならあたしが決めちゃうよ！』

「ちょっ」

↓・邪魔をするなら容赦し　ないぞ　〜ピッ

ぎゃあああ！！

やりやがったぐみのやつ！！どんだけバーサーカーなんだよ！

「ねぇ、どうするの？」

ヤバい、この格好であんなセリフを言ってしまったら、今度こそこの名も知らぬ女子に犯罪者のレッテルを張られてしまう！

しかもあの選択肢には何らかの強制力があるらしく、いくら口を閉ざそうとしても、俺の意志とは関係なく言葉を紡ごうとするのだ。

「……ッ！」

しかし全く抵抗できないというわけでもなさそうだ。

マップ移動時ほどの強制力ではないらしく、例えばセリフの内容は俺が決められるようなのだ。ただし、ここでも時間制限があり、それを過ぎるとは自動的にあの選択肢のセリフを喋らされるみたいだ。…曖昧な表現ばかりで申し訳ない限りだが、俺も初体験なので勘弁してほしい。

とにかく俺がやるべきことはどうやら、時間内に選択肢のセリフをソフトな言い回しに変えて話すことらしい。
バトルパートに入るのもやむを得ないと思わせるセリフ回しを考え出さないと、俺が何でも暴力で解決しようとするやつみたいになる…。
この格好でそのキャラは致命的過ぎだ。　どうせゲームの中だし、気にすることねーじゃんと思う人もいるかもしれないけど、当人的にはそうもいかないのだ。
自分がそういうキャラだと思い込んでしまうと、そういう行動を取るようになってしまう。
怪異のキャラクターが、人間の認識に左右されるのと同じだ。あるいはその逆というべきか。
だから俺は考えた。
俺が犯罪者にならない言い回しを、ＲＰＧの主人公に足るセリフ回しを。
そして、浮かんだ１つのセリフ。
俺はそれを、主人公らしく、明るく、元気に、声に出す。
「レッツパーリィィィ！！」
「見知らぬ不審者が狂気の犯罪者にジョブチェンジした！？」
見知らぬ女子が引いていた。
実に実に。
どうやら俺は、セリフのチョイスを間違えたらしい。

↓拒絶Ａがあらわれた！
↓拒絶Ｂがあらわれた！
「まーた露骨なネーミングだな…」
「てか何で私もこのバトルに参加してるの？」
「共犯だと思われてんじゃね？」
「不名誉極まりない！！」
うん、ごめんね巻き込んで。

『どうしようにーちゃん、逃げるのコマンドが選べない！！』
『てことはボス戦なんだろ？だったら仕方ねーさ』
つーか、一応約束を守ろうとしてくれたんだな。
まさか俺が人質としてここまでの力を持っていたというのか？
いやいやまさかねぇ。
ブラコンじゃあるまいし。
『いいの！？いいんだね！？後で「あんときたたかうコマンド選んだからご褒美は無し」とか言わない！？』
『言わねーよ！見知らぬ女子のほうは仕方ないにしても、何でお前からの支持率も０％なんだよ！』
怜悧もそうだったけど、こいつらはどんだけ俺がそのご褒美とやらを撤回することを危惧しているんだ。
内容がキスをするとかならまだしも、約束した以上は撤回なんかしねーよ。

→たたかう　〜ピッ
　まほう
　どうぐ
　にげる

ぐみがコマンドを選び、それによって俺の動きが最適化される。
最初に動いたのは俺。
どうやら《拒絶》は《お人好し》ほど速さがないらしい。
がつんっ！
→拒絶Ａに５５のダメージ！
「……うわ」
「リアルに引かないでくれよ！傷付くじゃねーか！」
「…釘バットで女の子を殴ったんだから、傷付いておきなさい」
そう言って彼女は、自らの武器を構え、攻撃的な目をした春風――《拒絶》に銃口を向けて、引き金を引く。

ドンッ！
↓拒絶Ａに４８のダメージ！
「あれ？まだ死なないんだ…。面倒くさいなぁ」
「俺以上に反省点満載じゃねーか！」
「まだ死なないんだ」って言ったぞ！自分が銃撃した相手が立ち上がったのを見て「面倒くさい」とか言ったぞこの女子！
「えー？戦闘中にそういうこと気にするー？器が小さいなぁ」
「拳銃で女の子を狙撃したんだから、少しは傷付きなさい！」
「私はいいのよ！あんたと違って可愛いから！」
「お前絶対女子の友達いないだろ」
「何で知ってるの！？」
「誰でもわかるわ！！」
自分の容姿を理由に好き勝手やるやつが同性からの反感を買うのは、あらゆる作品で使い古されたパターンだ。
人のこと言えねーじゃねーか。
『…うん？今のにーちゃんの言い分、妖怪変化の正体を見破ったあたしの論理とほとんど同じなような…？』
「さーて気を引き締めろ、あいつらの攻撃がくるぞ！」
「え？あ、うん…どうしたの急に。何かを誤魔化すみたいな口調になってるよ？」
↓拒絶Ａのこうげき！
「……っ！」
『にーちゃん！大丈夫！？』
『っあぁ、平気だ…っ』
↓りんりに１６のダメージ！↓拒絶Ｂのこうげき！
↓りんりに１４のダメージ！『マスター！』
『大丈夫だって、体力はまだ　３／４近くある！』
不本意ながら、この町に入る前にレベル上げをしていたおかげで、ダメージはそんなにない。このペースなら、敗北の心配はほとんどないだろう。

「だとしても、結局攻撃を食らっちゃうのは変わらないでしょう？あんたがボコられる分にはいいけど、私が攻撃されたら嫌だし…」
「自己中の見本みたいな女だなお前は！」
「いやぁそれほどでも～♪」
「誉めてねーよ！懐かしいなそのセリフ！」
『にーちゃん、楽しいお喋りもけっこーだけど、今は戦闘中なんだからね！』
『ん？あぁ、わかってるけど…』
どうしたんだ？何かピリピリしてるような…。
「それよりさ、あんた何か大きいダメージが期待できるスキル持ってない？」
「スキル？そういやレベル上げのときに何か覚えてたな…」
ステータス画面を呼び出し、魔法の項を確認する。
・まほう
フルスイング

……。
いやいやいや。
とりあえず、魔法じゃねーじゃん。
『ん？魔法使うの？りょーかい、任せてー！』

たたかう
↓まほう
↓フルスイング　〜ピッ
どうぐ
にげる

「ちょっと待てェェェェ！この格好でそのスキルはだめだろう！！この小説年齢制限かけてねーんだぞ！」
今はまだ戦闘中の描写に関する苦情みたいなものはきてないけど、

さすがにこれは…
「でもあんた、さっきも釘バットであの子を殴ってたわけだし、そんなの今更じゃない？」
「お前あんとき引いてたじゃん！何で肯定側みたいなスタンスなんだよ！」
「この世界で生き残るためにはね…綺麗なままじゃ、いられないのよ」
「騙されない！そんな風にそれっぽいことを言っても、俺は騙されないぞ！」
「それにこういうのって、血がドバーッとかブシャーッとかならなければ大丈夫なんでしょう？コロコロコミックのギャグ漫画には、キャラクターが車に轢かれて死ぬとかが日常茶飯事な漫画があるわよ」
「現実と漫画を一緒にするな！あれはギャグだからまだ許されてるんだよ！」
「でんじゃらすじーさんとか、あれ普通に大量の吐血をしてるじゃない」
「実名を出すな！あれはだからあくまでギャグタッチだから許されてるんだって！」
…でも確かあの漫画って、シリアスな長編もやってたよな…。だとすれば、何か他の基準があるのかもしれない。
素人がいい加減なことを言っちゃいけないよな。
「とーにーかーくー！血が出るわけでも相手が生々しく大怪我するわけでもないんだから、サクッと殺っちゃいなさい！」
「殺るかァァァ！！殺ってたまるかァァァ！！そこは越えちゃなら
「えぇいうるさい黙れさっさと殺らないなら私があんたを殺る」見知らぬ女子が劇的ビフォーアフター！！」
最初に不審者ルックの俺に引いてたお前はどこに行ったんだ！？まぁあのキャラが戻ってきてもひたすら引かれるだけだから「帰ってこい」とは言わないけどね！

「く…っ！負けるかよ！そんな安っぽい脅迫に、俺は屈しな…」
かちゃっ。
「仰せのままに、マドモアゼル」
…いや、待て。まず言い訳をさせてくれ。
だってあれ、返事があと少し遅かったら発砲してたぜあいつ！目が据わってたもの！有言実行の信念がピリピリ伝わってきたもの！仕方ないじゃないか、殺らなきゃ俺が殺られるんだ！
↓りんりのこうげき！
↓りんりはまほう、　フルスイングをつかった！
ごっ！！
↓拒絶Ｂに　１０１のダメージ　！
「拒絶Ｂィィィィィ！！」
許してくれ…！弱くて弱々しくて弱っちい俺をどうか許してくれ…！
「なかなかやるじゃない！これならまとめて倒せるわ！」
↓謎の少女のこうげき！
↓謎の少女は機関銃を掃射　した！
ズガガガガガガ！！
↓拒絶Ａと拒絶Ｂはまとめ　てデスった！
「デスったって何ィィィ！？」
「死んだってことでしょ？」
「わかってる！わかってるけどよ…！」
わざわざ面白く言う必要ないじゃん！これじゃあの２人は、あのギャグ１つのために命を奪われたようなもんじゃないか！！
『繰り返すようですがマスター、彼女らは感情ですので、命なんて最初から持っていません。この世界での戦闘はいわば心の葛藤と同義です。感情を押さえ込むなんて、誰でもやっていることでしょう？』
『…にーちゃんにとっては、そういう問題じゃないみたいだね…』
「ほらほら、何を放心してんの？私たちの冒険は、まだまだこれか

らよ！」
「俺は…なんて無力なんだ…」
こうして。
打ち切りされた漫画の主人公みたいなセリフを言う女子に曳かれて。
俺は春風が『なかったこと』にした、心の奥へと足を踏み入れた。

最初のダンジョン《エントランス・トゥ・ハート》→無責任な覚悟

ダンジョンに足を踏み入れると、エフェクトとともにステージ名が眼前に浮かび上がる。

《エントランス・トゥ・ハート》

それが、このダンジョンの名前らしい。

「仮面の町に続いて心の入り口か…。分かりやすいというか、露骨過ぎるというか…」

「ハイハイ、帰っておいで～。キミの住む世界はそこじゃないよー」

「……」

さっきの戦闘で不審者認定は解除された（うやむやになったと言ったほうが正しいかもしれない）が、電波認識はそのままらしい。

つーか、今のダンジョン名も見えてなかったのか？

ゲームのキャラなんだし、もーちょいメタ視点に対応してくれてもいいのに…。あるいは、ゲームのキャラだからメタ視点に対応してないのか？ならなぜナルト好きなんてプロフィールがあったり、でんじゃらすじーさんを知っていたりするんだ…。

わけが分からん。

俺よりよっぽど電波だ。

「で？ここからどうするの？」

「へ？どうするって、何の話だ？」

「…囚われの女の子を助けに来たんじゃないの？」

「…あぁー」

あれ、信じてたんだ…。

思った以上に純真無垢なやつだな。

「何よ今の間は…。まさかあんた、私を騙したの！？」

「いや、そうじゃねーよ。大丈夫、もう忘れねー」
「忘れてたの！？なんか囚われの女の子、扱いがぞんざい過ぎない！？」
『また忘れたのですかマスター！？私はマスターにとってそんなにどうでもいい存在なのですか！？』
『オメーじゃねーよ！！春風のほう！！』
愚妹' s専用回線を通じて怜悧に突っ込む。この回線のおかげで、電波扱いされる機会はめっきり減ったけど、あれ以来怜悧が『忘れる』という単語に過剰かつ過敏に反応するようになってしまった。
…悪いことしたなぁ…買い物、今度の日曜日だっけ。お詫びついでに、パフェでも食わしてやろう。
「…本当に、私を騙したわけじゃないのね？」
あ、疑心暗鬼になってる。
まずいな…ここで信用を失えば、こいつはパーティーから離脱してしまうかもしれない。
ここから先の春風は、さっきの《拒絶》との戦闘を見る限り、今までのワールドマップのようなゆるい感じじゃないだろう。攻撃してくるようになった春風達を、俺1人では到底さばけない。
ここでこいつの信用を失うのは望ましくない。
誠心誠意を込めて、電波扱いされない程度に俺の現状を説明しよう。
ひぐらしのなく前に、疑心暗鬼を解いておこう。
「助けに来たってのは、本当だ。ただ、あいつが囚われてる（ということにしておこう。この辺は説明が難しい）場所がここかと聞かれたら、自信を持って答えることはできない」
「…じゃあ何でここに来たの？」
まだジト目。
なんとなく、預かった子どもの警戒心を飴で解きほぐそうとしている人の気分。
「ほとんど成り行きだけど、決め手はお前の話かな。『なかったこ

とにされてる洞窟』ってところで、もしかしたらって思ったんだよ」
さて、預かった子どもの様子は…？
「…なぜかバカにされてる気がするんだけど…」
侮れねーな子どもの勘。
「おいおい、人が誠心誠意を込めた説明をつかまえてバカにしてるはないだろう」
「…うん、そうなんだけど…そうだよね、ごめんなさい」
謝った！
突っ込まれるのを待っ…予想してただけに意外だ。
こんな素直でいい子に嘘をついてしまった…。
ちょっと罪悪感。
「それじゃ、その女の子を探しに行こっか。きっとその子も、助けが来るのを待ってるよ」
「えーと…でも、いいのか？この洞窟全部を探しても見つからないかもしれないんだぞ？」
巻き込んだ俺が言うことじゃないけど。
「まぁ、タイトルに『最初のダンジョン』ってついてるし、その辺は覚悟してるつもりよ」
「お前どういう立ち位置のキャラなんだよ！！」
何でこのゲームに対するメタ視点がないのに、読者的なメタ視点が語れるんだ！
「男の子が細かいこと気にしないの！ほらほら急ぐわよー！」
「…なんでいきなり協力的になったんだ？」
囚われの女の子を助けなければという義務感とかだろうか。まぁ、困ってる人がいたら助けたいと思うのは当たり前か。あんまり思わせ振りな伏線を張っといて、実は何でもありませんでしたじゃ格好つかねーしな。変に突っ掛かるのは止めとこう。
益体のない思考を打ち切り、謎多き電波女を追いかけようとしたけど失敗した。
マップ移動の主導権は、ぐみにあるんだった。

◇

いくら喜劇と前置きしておいたとはいえ、これではあまりにも喜劇過ぎやしないか？読者もいい加減飽きて、魔法科高校の劣等生とか読んでいるんじゃないだろうか。

まぁ、それなら幸いだ。

ここから先の俺は、ただひたすらに情けないから。

そんな自分を語るのは忸怩たる思いがあったので、喜劇と銘打って照れ隠しをしてみたりした俺だから、正直ホッとしている。

情けない自分に失望されるより、いつまでも続きそうなマンネリ気味のゆるふわギャグに飽きてもらったほうが、当人としては気が楽だ。

こんな弱音を吐く時点でかなり情けない気がして、自分の小さが嫌になるけれど、まぁいいか。

きっともう、誰も見ていないだろうから。

読者からの支持率も、０％だろうから。

だからこのままなぁなぁで終わらせても問題ないとは思うけれど、けじめは必要だ。

語った者の責任として、最後まで語ろう。

先伸ばしにして誤魔化すのも、もう限界だから。

観念して、開き直って、自分の醜態を晒そう。

もし、いまだ俺の語りに耳を傾けてくれている奇特な人がいるのなら、前置きを１つ追加しておこう。

ここから先は、ただの愚痴だ。

主人公になれなかった道化のやっかみだ。

上条　当麻のような心を打つ名言なんか言わないし、吉井　明久のような諦めずに戦う姿なんかどこにもない。

他の読者にならって、気になっている他の小説をチェックすることをおすすめする。

春風じゃないんだ。
人の愚痴なんて、聞いても楽しくないだろう？

◇

「ねぇ、もしかしてあれじゃない？」
未だに名前を知らない少女が何かを見つけ、それに続いて俺も、少女が見つけたそれを認識する。
それは牢屋のようなものだった。ていうか牢屋だ。
洞窟の一角に鉄格子がはめてあって、中に人が…みすぼらしい格好をした春風が閉じ込められているから、牢屋と称するべきだろう。あるいは地下牢か？
何でも同じだ。
俺は、春風を助けに来たんだから。
「最初のダンジョンって表記は、フェイントだったんだねぇ…」
「こっからは面白い話は抜きだぜ。シリアスパートに入るために、わざわざ自虐的な地の文を挿入したんだからな」
「あぁー、あの根暗な感じの独白はそういうことだったんだ」
「何でお前が俺の独白を知ってるんだよ！！本当にどういうポジションにいるんだお前！」
面白い話は抜きだって今言っただろうが！
ギャグパートで飽きてもらったほうが気が楽だとは言ったけれど、別に見放されたいわけじゃないんだよ！前言撤回なんかさせんな！
「だって、しんみりした感じって好きじゃないんだもん。お葬式とかだって、みんなでしんみりするより、みんなで盆踊りとかしたほうが、送られる人も楽しくない？」
「それ普通に不謹慎なだけじゃねーか…？」
あれだけ中2臭い前置きをしておいて恥ずかしい限りだが、そんな感じで楽しくお喋りをしながら、牢屋に近づいて行く。
自分がこれからやろうとしていることの、意味も知らずに。

「よー春か…」
「きゃぁぁぁぁぁぁ！？」
檻の中の春風は俺を見るなり悲鳴を上げて、牢屋の奥に逃げてしまった。
まぁ、奥なんて形容詞が使えるほど広くないから、牢屋の隅に逃げたと言ったほうが正しいのかもしれないけれど。今はそういうの、どうでもいいや。
女子が自分の姿を見るなり悲鳴をあげるって、ここまでキツいんだ…。
《拒絶》の攻撃より効いた。
『えっと…ごめんね、にーちゃん』
『えっと…元気を出してくださいマスター』
「えっと…まぁ、その格好じゃあ仕方ないわよ」
3人がそれぞれ慰めてくれた…いや、最後のは微妙だったけど。
そうだった…名前を知らない少女とあまりにも普通にお喋りしていたから忘れていたけど、俺は今不審者の格好をしているんだった…。
いつまでもへこんでいても仕方がないので、マスクとサングラスを外して素顔を晒す。今までそれをしなかったのは、どうも装備品は自分の意思では付け替えられないものらしく、まるで体の一部になっているみたいに外せなかったからなのだが…どうして今は外せたんだろう。
『牢屋の前についたあたりからイベントが始まっているからですね。発生したイベント内での言動は、基本的に主人公であるマスターの自由です』
『解説してくれてありがとう。ただ何でお前らは当たり前のように人の地の文を読んでんだ！』
あるいは、あいつらが俺の心を読んでいるのではなく、俺の心があいつらから見たら見え透いているのか？
そんなにわかりやすいのかな俺って…。

閑話休題。
「ほら、俺だよ春風。お前を助けにきた」
「え…？緑野くん？」
俺の素顔を目の当たりにして、恐怖に染まっていた表情が困惑のそれに塗り替わる。
まぁ、普通ならあり得ない来客だもんな。
「え？あれ？どうして？何で、緑野くんがこんなところに？」
「お前が妖怪変化に遭ったから、助けに来たんだろうが」
「私が…？」
「何だよ、覚えてねーのか？」
人は意識を失う直前の記憶を失うことがあるっていうのは聞き覚えがあるけれど。
妖怪変化の際も起こりうるのか？
「あ…そうじゃなくて。私は、緑野くんが助けに来てくれた春風薫じゃないの」
「へ？春風じゃない？」
何言ってんだ？外見こそみすぼらしいが、その笑顔には見覚えが…。
そこで、はたと気付く。
目の前の春風は、俺のそんな様子にくすくすと笑ってから、ちょっとだけ得意げに種明かしを始める。
「ここに来るまでに、私以外にもたくさんの春風　薫に出会ったでしょう？私も、あの子たちと同じ。緑野くんが春風と呼ぶ女の子の、感情の１つだよ」
…完璧に騙された。
いや、目の前の春風からすれば、俺が勝手に勘違いをしたというだけのことだろうし、それが真実だと思うけど。
それにしたって…。
「じゃあ何で閉じ込められてんだよ、紛らわしいな。こんなところに入っていたら、誰だって間違え…」

そこまで言って、やっと気付いた。
違和感。
目の前の牢屋の、異質さに。
「何でって…それは、あの子が私という感情の存在を許してくれないからよ」
「……」
質問に対する感情の答えは曖昧で、だから俺は彼女に再び問うべきだったのだろうけど。
俺はそれをしなかった。
俺の目が、俺の意識が、牢屋の床に敷き詰められたそれに、奪われていたから。
「…正直未だに世界観がよくわからないけれど。とりあえず、存在が許されてないって、どういうこと？」
いつまでも質問をしない俺に痺れを切らしたのか、名前のわからない少女が、牢屋の中の感情に問いかける。
しかし返ってきたのは、またも要領を得ない回答だった。
少なくとも、俺が名前を知らない少女にとっては。
「その説明を分かりやすくするために名乗るなら、私の名前は《幸》。春風　薫の、自分の幸せを求める感情」
――――ああ。
それで納得がいった。
こいつがあの町で『なかったこと』にされた理由も、あの日の春風の言動も、牢屋の床をそれが埋め尽くしている理由も。
「あの子は昔、誰かに酷いことをしたんだって。だから私はいちゃいけないんだって、だから私は幸せになっちゃだめなんだって…。そう、言っていたよ」
あの日。
下駄箱のところで見た、虚ろな春風は、誰かに酷いことをした自分を思い出していたんだろう。
牢屋の中に何かへの手紙が敷き詰めてあるのは、きっと《幸》が

投獄されているのと同じ理由だ。親切の権化みたいな春風からすれば、誰かに酷いことをしたという記憶は耐え難い苦痛だろう。
なんだよ。
あの日下駄箱に入っていた手紙は、やっぱりいじめなんじゃないか！
「ふざけないで！何をしたか知らないけど、幸せになっちゃいけない命なんかない、そんなの認めない！待ってなさい、こんな檻なんかすぐにぶち破って…！」
「だめ！そんなことをしたら、あの子はあなたたちに依存しちゃうよ！」
「はぁ？私たちに依存？それの何がいけない？」
俺が名前を知らない少女は、かなり憤っているらしく、その危険性に気が付いていない。あるいは、《幸》の言葉の意味をわかった上で、そのリスクを『大したことじゃない』としているのか。
「…あなたたちが私を肯定すれば、それはあの子にとって、あなたたちは自分が幸せになっていいという唯一の証明になる。あなたたちの存在を、心の拠り所…どころか、自分の心の一部のように見るかもしれない。そうなったら、あなたたちは一生、あの子に付きまとわれちゃうんだよ？」
《幸》はそう言って、困ったように微笑む。
俺が名前を知らない少女が《幸》の話を聞いて口をつぐんだのは、春風に一生付きまとわれることが嫌だからではないだろう。
少女が躊躇したのは、おそらく《幸》が意図的に伏せたであろうもう1つのデメリットに気付いたからだ。
春風が俺たちに依存し、俺たちを自分が幸せになっていい根拠とすれば、それは俺たちのどちらかが欠けただけで、春風は自分の幸せを否定してしまうということだ。
再び《幸》を、この牢屋に閉じ込めてしまうということだ。
俺が名前を知らない少女はこのゲームのキャラであり、実在の人物、団体とは一切関係ない。

だからつまり、俺がこのゲームをクリアした瞬間に、俺たちが《幸》を助けた意味がなくなってしまうのだ。
「心配してくれてありがとう。でも私は大丈夫だよ」
そう言って《幸》は、たぶん俺たちを安心させるために、しかし結果として、俺たちの心を抉るような優しい笑顔を…春の日差しのような微笑みを、俺たちに向ける。
「これは、私たちが悩めばいい問題だから」

閑話→とある少女の追憶手記

彼女に出会ったのは、土の中の虫さんたちが眼を覚ます頃のことだった。

…こう言ったら、るかちゃんはまた、私を変な子みたいに言うのかな。

私は普通だよ！

あの日の私は、新たな環境への期待よりも、新たな生活への憂鬱さのほうが大きかった。

ひねた小学生だったと、自分でも思う。まだ入学式の前だったから、厳密には小学生じゃなかったのかもだけど。

小学校への入学を控えた子どもって言うのが1番正確かな。

えっと、とにかくそんな感じのときに、私は彼女と出会ったんです。

後に親友と慕い、多くの時間を共に過ごすことになる女の子と。

後に裏切り、とても悲しいお別れをすることになる女の子と。

るかちゃん。

私たちは、何のために出会ったのかな。　私たちの出会いは、あのバッドエンドの前振りでしか、なかったのかな。

…ごめんね、変なことを言って。

私たちの出会いが何であれ、るかちゃんはきっと、私と出会ったことを後悔はしていないよね。

私も同じだよ。

あの出会いがバッドエンドの前振りだとしても、私はるかちゃんに会えて良かったって、やっぱりそう思う。

久しぶりに、あの頃を思い出してみよう。

最初のダンジョン《エントランス・トゥ・ハート》→後ろ向きな決意

「甲斐性無し」
牢屋から離れ、しばらく歩いたあと。
ずっと口を閉ざしていた名前のわからない少女（　俺と同世代くらいだから、少女と呼ぶのがはたして正しいのかも俺にはわからない　）は、開口一番にそう言った。
「根性無し。意気地無し。みっともなし！」
「…みっともなしってなんだよ」
無理矢理「なし」で繋げんな。
「冷静になって考えてみたら、あの檻、あんたが壊せば良かったんじゃない！そうすれば、《あの子》は私じゃなくて、あんたに依存するんでしょ？」
「そんなことしたって、問題は解決しねーよ。他人に依存するってことは、存在の自由度が下がっているってことなんだから」
虐待を受けた子供のように。
あの檻を破壊すれば、春風の未来に存在する、多くの可能性も壊してしまう。
「だったら、破壊した可能性の分だけ幸せにしてあげたらいいじゃん！それくらいのことも言えないからタマナシって呼ばれるのよ！」
「女の子がタマナシとかってシャウトすんなや！」
つーか呼ばれてねーし。
呼ばれてたまるか。
「根拠の無い安請け合いは、助けないことより酷い暴力だと思うけどな」
「それはっ…これから頑張ればいい話でしょう！？」
「頑張らないやつの常套句だな」
そんな無責任な計画で他人の人生を背負えるほど、俺は純真無垢でも厚顔無恥でもない。

「……」
「納得したか？したなら早く準備を整えろよ。この部屋には、今までの敵とは比べ物にならない…」
「納得なんかしてない。あんたはなんだか賢そうな理屈を並べてるけど、要するにあの子を見捨てるってことでしょ？」
「…助け合い励まし合いの精神はそりゃ大事だろうけど、本来は自分の力で助かるべきなんだ。本人が助かろうとしなければ周りが何をしても無意味だし、当人が助けを当てにしていたら、何度助けても無価値だ。人の手を借りて助かった野生動物は、借りた分だけ野生に帰れなくなる。人は結局、勝手に助「うるさいうるさいうるさい！！言い訳なんか聞きたくない！！」
俺の言葉が終わる前に、彼女の憤怒が、活火山のように噴火する。堪えきれなかった想いが、傷口から溢れる血液のように、やりきれない痛みを訴える。
「あんた、あの子が何て言ったか覚えてる？『私は昔酷いことをした、だから私はいちゃいけない』って、そう言ったのよ！私たちのことを気遣って、『助けるな』って警告したのよ！？他人にあれだけ優しくなれるくせに、その優しさが一つも自分に向いてないのよ！？」
よほど腹に据えかねたのだろう。俺の言葉を押さえ込み、情けない言い訳を呑み込んで、彼女の感情の波が打ち付けられる。《幸》の境遇への怒りが、みっともない俺への憤りが、荒波の如くぶつかってくる。
「あの子が何をしたかなんて知らないし、何かをされた人からすれば、確かにあの子は幸せになっちゃいけないのかもしれない。だけど、私はそんなの認めない！幸せになっちゃいけない命があるなんて、私は信じない！自分からさえ『幸せになっちゃいけない』なんて言われてるなら周りが助けてあげなきゃダメじゃない！私たちが、手を差し伸べてあげなきゃウソじゃない！」
あの子はあんなに――――優しいんだから。

彼女はそう言って、俺を見た。
なぜだか鈍いとぐみに言われる俺だけど、さすがに今、彼女が何を求めているかは分かる。
謝罪。肯定。同意。
自分の間違いを認め、ごめんなさいと謝り、少女の意見に従うこと。そんな未来を願っている。サンタクロースの正体を知ってなお、その存在を信じようとする子供のように。
だから俺は答えた。

「悪いな。俺はあいつを助けない」

「え――――？」

自分の、偽りない本音を。
期待には応えられない分、誠実に答えた。
俺はあいつを助けない。だって――――
「…私は助ける」
力なく、輝きなく。
蝋燭に揺らめく火みたいに弱々しかったが、それでも彼女はそう言った。
間違っているのは俺のほうだと、主張した。
「私1人で助ける…。1人でも助ける！そうだよ、檻を壊せないなら、壊さずに助ける方法を見つけたらいいんだもん！」
そんなものあるはずが無い。ここは春風の心の中なのだ。
自分で自分を否定している以上、自分が助かる方法なんて用意してあるはずがない。
本人が助かろうとしない限り…周りの助けは無力だ。
「見てなさいよ！どんな命も、助ければ助かるって、証明してやる

んだから！」
そのことに気付いていないのか、あるいは気付いてなお、そう主張しているのか。
いずれにしろ、彼女はそう叫んで走り去った。
俺の行く手には「この部屋から強い気配を感じる…」のメッセージ。

ボス戦の直前に、俺はまた1人になった。
『…どうしますマスター？彼女を追いますか？』
「いや…このまま行く。あいつを追ったら、《幸》を助けることになるし」
俺は助けない。だって、助けるってことは、また失う可能性を生むってことだから。
『…そうですか』
「情けない兄貴で悪かったな。嫌いになったか？」
『私は、どんなマスターでも大好きです』
『あー！怜悧が抜け駆けしたー！あたしだって、にーちゃんのこと大好きだよ！』
「…そこは嫌いになってもらわないと困るんだけどな」
俺の情けなさを――――肯定して欲しくなかった。
どこまでも自分勝手だな…俺は。
「…っし、んじゃよろしく頼むぜマイシスターズ」
『はいはーい！』
『お任せ下さい』
とにかく今は、春風の妖怪変化を止めることを考えよう。
あとのことは、その時頑張ればいい。

最初のダンジョン《エントランス・トゥ・ハート》→《強迫観念》

神々しい。
それが、かつて建物だったらしきこの場所の第一印象だ。
左右に立ち並ぶ石柱も、遥か頭上を覆う天井もぼろぼろだけれど、場を支配する威厳のようなものは、全く朽ちていない。
ただここに在るだけで人を跪かせるような存在感。
朽ちてなお、他を圧倒する威厳。
およそ春風のキャラクターからは連想できない空気を、この場所は内包している。
「…ここは、どこだ？」
誰に聞くでもなく、そんな間抜けな疑問を呟く。
誰に問うでもなく呟いたその質問に、しかし誰かが答えた。
「幸せの成れの果て…美しき思い出の残骸だよ」
「ッ！」
この場所の中央に目を向ける。
そこには———
「はる…かぜ…？」
「どうしたの、緑野くん？そんなおぞましい者でも見るような目をしないでよ、傷ついちゃうよ？」
「え…あ、悪い…」
謝ってしまった。
読者の皆さんから「おいおい何を謝っているんだ、そこは否定するところだろう？謝ったらおぞましい者でも見るような目をしていたと認めるようなものじゃあないか」などと怒られてしまいそうだが、１つ言い訳をさせてほしい。情けないついでにみっともなく言い訳をさせてほしい。
蜘蛛。

春風の下半身が、蜘蛛のそれになっていたのだ。
ケンタウロスのあの馬の部分が、そのままそのもの蜘蛛のそれになっていると言えば伝わるだろうか。それでいて上半身はピンク色でひらひらした感じの（　フリルっていうんだったかな？　）服に、伊達　政宗が着けてそうな眼帯を両目に装着している。
今年度のミスマッチ大賞ぶっちぎりの第一位だ。
独眼竜ならぬ零眼蜘蛛とでも呼ぼうか。
「…その呼び方は止めてほしいかも」
普通に『春風』でいいよ、と返す『春風』。
眼帯のせいで目は見えないが、困ったような笑顔を浮かべているのを見ると、こいつも春風の一部なんだと実感する。
一歩。足を出す。
一歩。春風に向かって歩み寄る。
足音が残響することなく端的に響き、場の静けさを際立たせる。
崩れた天井から差し込む光が描く円の中に踏み入り、春風と点対称の位置についたあたりで、俺は足を止めた。
「まず、何で緑野くんがここにいるのかを聞いてもいいかな？」
春風の質問が、静寂に変化を与える。
何が戦いの引き金になるかわからない緊張に冷や汗を流しながら、俺は慎重に答える。
「お前の…春風の妖怪変化を止めにきた」
「妖怪変化？」
意外、といったようなリアクションを見せる春風。
そういえば、《幸》も似たようなリアクションをしてたけど…
「まさか、知らなかったのか？」
「うん、知らなかった。このあたりはまだ堕ちてないし、私はほら、見ての通りマイナス感情だからさ。そういうマイナス変化には鈍いんだよ」
「マイナス感情ね…」

外見で相手を判断するのは良くないが、それでも『やっぱり』という感じだ。
下半身が蜘蛛のプラス感情があってたまるか。
「じゃあ、緑野くんは私の…薫の最心部に行くつもりなんだね？」
「……あぁ」
バトルパート突入な流れになってきたので、警戒を強めながら答える。
「最心部なら、この奥にある出口から出てすぐだよ」　そんな俺を見て、マイナス感情は軽く微笑みながら道を教えると――――
「薫のこと、よろしくお願いね」

……。
「へ？」
「…え？助けに来てくれたんだよね？」
「いや、まぁ…そうなんだけど」
「じゃあ、薫のことお願いしていいんだよね？」
「いや、まぁ…そうなんだけど」
どうやら、戦う意思は無いらしい。
少し…というか、かなり拍子抜けだ。
「…じゃあ、素通りしていいのか？」
「通せんぼする理由がないよ…」
呆れたような調子で返される。
…いや何でお前が呆れる側なんだよ。なぜ俺のほうがおかしいみたいな感じになっているんだ？
釈然としないものを感じつつも、とりあえず蜘蛛春風の後ろにあるらしい出口を目指して歩いてみる。
…本当に妨害しねーよこいつ。むしろ微笑みながら手を振って見送ってらっしゃるよ。
ただのイベントキャラってオチかな…。

「あ、そうだ蜘蛛春風」
「…その呼ばれ方すっごく嫌だよ…。同じ春風なんだし、普通にいつも通り呼んでよ…」
こいつがイベントキャラならあるいは…
「この洞窟にある牢「開けちゃ駄目」
すんごい早さで拒否られた…。
『牢屋』の『ろ』が言い終わるころにはもう内容にアタリをつけてたみたいな早さだ。
高校生クイズ甲子園の解答者かよ。
「開けちゃ駄目「それは駄目「それだけは駄目「絶対に駄目「殺してでも駄目」
機械的に、無機質に。
ただひたすら『駄目』を連ねる蜘蛛春風。
あの日下駄箱のところで見たのと同じ…いや、剥き出しのマイナス感情であるこいつは、それ以上の暗い輝きを放っている。
「…何で駄目なんだよ？せめて理由を教えてくれよ」
目の前のマイナス感情に気圧されながらも、それだけは訊ねた。
訊ねたかった。

「なら殺す」

「……は？」
ちょっと待て。
今人類の会話に必要なステップが丸々省略されて、英語の教科書もびっくりの不自然なセンテンスが歪に形成されなかったか？
「なら殺す「それなら殺す「残さず殺す「骨まで殺す「死ぬまで殺す「死んでも殺す」
「一回殺せば充分だろ！？」
って違う！落ち着け俺、正気を取り戻せ！どう考えたって、論点はそこじゃない！

目の前のマイナスは今！躊躇うことなく俺の殺害を決定しやがった！
「ちょ…待て春風。一旦落ち着「私は許されちゃ駄目なんだ「人の話を聞けよ！」
ダメだ…完全に自分の世界にトリップしてる！！
『…なんか意外な形でバトルパートに入ったねぇ…』
「呑気でいいなァプレイヤー様はよォ！！」
もう俺に電波の容疑をかけるものはいないので、おもいっきりシャウトする。
そう、いない。
この狂気のマイナスを、俺1人で相手にしなければならない――！
「どちくしょーーー！！」
「購い続けなければ…私は許してもらえないんだ！！」
彼女の服が、瞬く間に黒く染まる。
明らかに本編とは関係ないところで、俺の命懸けの戦いが始まった。

閑話→とある少女の幸福回顧

憂鬱で仕方がなかったはずの新たな生活を、しかし私は満喫していた。

理由は簡単、友達が出来たから。

「るかちゃん、おはよー！」

「うん、おはよー！」

教室に入ってすぐ、友達のるかちゃんに挨拶をする。そのあとは先生がくるまでおしゃべりして、休み時間には一緒に遊んで、放課後にはたまにるかちゃん家で遊ぶ。

ありふれた幸せだったかもだけど、私は楽しかったし、るかちゃんも満喫してたと思う。

「にしても『るかちゃん』って呼び方になれちゃうなんて…。私も普通じゃなくなってきたのかなぁ…」

「あはは、その言い方だとまるで私が変な人って言われてるみたいだねー！」

「…そう言ったつもりだけど…」

「……」

「……」

「あはは、その言い方だとまるで私が変な人って言われてるみたいだねー」

「丸々そういう意味だよ！？」

リテイク失敗。

真っ向から包み隠さず言われちゃった。

そんなに変かなぁ…私は普通だよね？

「自分で普通って言ってる人ほど普通じゃないらしいよ？」

「…るかちゃんひどい…」

若干泣きそうなのをこらえて非難する。でもるかちゃんはそんなのお構い無しに、お胸を張って『まぁ、私は普通だけどね』みたい

な得意顔。
…涙は女の武器だって聞いたことがあるけど、同じ女の子には効果がないみたい…。
「まぁ、私は普通だけどね！」
「…あれ？るかちゃんの主張と行動が噛み合ってないような？」
「……？そうかな？気のせいだと思うけど…」
「…気のせいかな？」
「気のせいだよ！」
「気のせいかー」
こんな感じのおしゃべりをして過ごするかちゃんとの毎日に、暖かくって幸せだった。
教室のどこかから、私たちに向けられた悪意に、気付けないほどに。

最初のダンジョン《エントランス・トゥ・ハート》→ＦＦ１３が気になるけれど

「うおぁぁぁああ！！」

蜘蛛春風が打ち出した黒い光球（　変な言葉だ　）を体が文字通り勝手に回避し、右手に釘バットが召喚される。

…一応仮にもこのゲームの主人公なのに、武器が釘バットってどうなんだろう。しかもいまだに不審者ルックのままだし。

『大丈夫ですマスター。かの有名な主人公、クラウド＝ストラトフの装備品にだって釘バットがありましたから』

「その手のセリフを聞くたびに疑問に思うんだが、お前そういう知識をどっから持ってきてんだ？」

つい先日生まれたばかりの怜悧に、そういうものに触れる時間はなかったはずだけど。

『人間との共同生活のための講習で教わりました』

「国は税金を何に使ってんだ！！」

ガラでもない体制批判をしてしまった。

何で共同生活の講習でそんなコアなことを学ぶんだ…。

『おりょ？怜悧ー、なんかバトル画面が今までと違うんだけど？』

バトル画面が違う？

どういうことだろう…キングダムハーツＲｅ：コーデットのボス戦みたいに、横スクロールになったりシューティングになったりしているのだろうか。

『いえ、コマンドバトル方式はいまいち盛り上がりに欠けるので、ＦＦ１２方式に変更しました』

「んな打ち切り寸前漫画のテコ入れみたいな理由でシステム変えんな！！」

つい長々とした突っ込みになってしまったけれど、そんな理由で振り回される現場の身にもなってほしい。こっちは実際に命懸けで戦っているのだ。

『大丈夫ですよマスター。別に負けても死んだりはしません』
「え、マジで？」
『えぇ、そこはゲーム世界にして、私の支配空間です。セーブさえしておけば、私の支配者特権でその戦闘をなかったことにして、セーブした地点からやり直せます』
「え、マジで！？じゃあ俺、ほとんど無敵じゃん！」
そうか、ゲームだもんな。セーブしておけばセーブ地点からやり直せるなんて、考えなくてもわかりそうなもんだ。紹介ページにチートのキーワード入れんの忘れてたぜ、あっはっはっは。
『あ、セーブするの忘れてた』
「ガッデェェェム！！」
キーワードなんかより忘れちゃいけないものを忘れていた。
そうだった…プレイヤーはミス・残念の称号をほしいままにする我が妹『ミス・残念って何！？呼ばれたことないよそんなの！』、緑野　ぐみその人『黙ってゲームを続けなさいダメ姉さん』『ダメ姉さんって言うなー！！』だったんだ『って跳んだー！蜘蛛跳んだー！』…え？
『ダメ姉さん、×ボタン！』
『こんな時でもそう呼ぶの！？』
「ぎぃゃぁぁあああ！！」
頭上に落ちてきた蜘蛛（　タランチュラみたいに毛むくじゃらなタイプ　）から逃げるべくダッシュしようとした矢先、体が勝手に前転した。
前転。
回避行動の王道とも言えるアクション。
『おぉー！にーちゃんがぐるりんちょ！』
『…なんだかダメ姉さんの精神年齢が徐々に下がってきているような…』
「それは俺も感じ…うぉぁっ！？」
再び蜘蛛春風が黒い光球を放つ。

向こうの会話ＢＧＭに、こっちのバトルは激化の一途を辿る。
『とにかくぐみちゃん、画面左下を見てください』
『ぐみちゃん！？今ねーちゃんのことぐみちゃんって呼んだ！？』
「っと…！黒の光球は３連射か…」
『コマンド方式の時と同じように、４つのコマンドを用意しました。《戦う》《防御》《回復》《ハズレ》のコマンドが見えまちゅか？』
『姉に対してまさかの赤ちゃん言葉！？怜悧にはあたしが何に見えてるの！？』
「あぶねっ！！糸吐いて来やがった！」
『コマンドは十字ボタンの上下で。今はいませんが、他のキャラクターへの命令は十字ボタンの左右で切り替えます』
『それよりこの《ハズレ》コマンドって何？』
「何だこの紫の液体！？毒攻撃か！？」
『《ハズレ》コマンドは条件が整うまで使えません。他のコマンドについては、今までと変わりません』
『コマンドに対応した能力が最適化されるってこと？ＦＦ１２っていうよりディシディアのコマンドバトル方式みたいだね』
「マジかよ…！？蜘蛛の脚にそんな使い方があっただと！？」
『商品名を出さないでください。作者の偏りがバレてしまいます』
『その辺はもういくら気を使っても今更じゃない？』
「黒の光球を一ヵ所にチャージしてる！？アクセラレータが空気を圧縮したみたいになってる！！」
『大丈夫です。スクウェア・エニックスを知らない人にはまだバレていないはずです』
『でもスクエニ知らない人って少数派だと思うよ？ＦＦとドラクエって、誰しも一度はやったことがあると言っても過言じゃないくらい世の中に浸透してるタイトルだし…』
「いい加減こっちに参加しろお前らァァァ！！」

キレた。
さすがにキレた。
現場が前線で命のやり取りをやってる間に何の論争を繰り広げてるだあいつらは…！
『いけません姉さん、私たちの最愛のマスターが大ピンチです！』
『ホントだ！あたしたちの大好きなにーちゃんが大ピンチだ！』
「それがさっきまで完全に放置してた人間にかける言葉か！」
嘘っぽさがバブル時代だ。
嫌いなら嫌いと言ってくれたほうが気が楽なんだが…。
『よーし、行くよにーちゃん！』
「あぁ、頼むぜホントに…」
ぐみがコマンドを選び、それに合わせてプログラムが俺を最適化する。
選ばれたコマンドは当然（たたかう）だ。
「よっしゃ、いくぜェェェ！！」
戦う力を借り受け、力強く地面を蹴って相手の懐に潜り込む！
蜘蛛春風は、人間部分こそ原寸大だが、蜘蛛部分はそれ単体で俺よりでかい。
しかし最適化された俺の脚力は、二倍以上あるサイズの差を難なく塗りつぶし…春風のところまで、飛び上がる！！
「……ッ！？」
『いっけぇー！にーちゃん！』
息を飲む蜘蛛春風と、すでにとどめの一撃みたいなテンションになっているぐみ。
蜘蛛春風が俺を迎撃しようとしてだろう、黒の光球を3つ生み出したが、もう遅い。
俺は大きく振りかぶった釘バットを、蜘蛛春風目掛けて――――
「ぐぁぁっ！」
『マスター！？』

『にーちゃん！？』
迷った。
釘バットで女子を殴ることについて考察した、その結果。
蜘蛛春風の光球が直撃し、俺はみっともなく地面を転がった。
『その議論は洞窟の入り口で終わったんじゃなかったの！？ていうかにーちゃんは、下が蜘蛛でも上が女の人なら構わないの！？』
「構わないってなんだよ！どういう視点からの突っ込みだそれ！」
『マスターの中での女性度は《妹＜下半身蜘蛛の人》なのですかということです』
「んなワケあるかァァァ！両方枠外だ！」
「…女の子なら誰でもいいってこと？」
「違うっつの！何でお前まで参加してくるんだよ！」
なぜか蜘蛛春風を含む全員から、よくわからない非難をされた。
…人間に限らず、命を傷つける行動を躊躇うのは、人として正しいことだと思うのだが…。
まぁ、確かにぐみの言う通り、これはもう終わった議論だ。それをいつまでもぐちぐち言っていたのだから、非難の１つもされて当然か。
「…よしっ、コンティニューだ。こっから先は、もう迷わない」
気持ちを切り替えるために、そう呟く。
おそらくは偶然そのタイミングで、蜘蛛春風が俺の頭上に飛び上がる。
自分よりもでかい蜘蛛（　しかもタランチュラ　）が降ってくるのは、何度見ても気持ちが悪い。
逃げるように回避し、反撃しようとする。
「って、また黒の光球かよ…！」
着地するとともに、蜘蛛春風は次の攻撃の準備を整えていた。
自分のふいにしたチャンスが如何に貴重だったか、遅まきながら理解する。
『あれもボールなんだし、こう、かきーん！って打ち返せないの？』

「……」
反射的に「馬鹿かお前は」と突っ込みそうになったが、確かにやってみる価値はあるかもしれない。
駄目で元々だし、成功すれば逆襲の足掛かりになる。
慣れないバット（釘付き）を構え、光球が飛んでくるのを待つ。今までの戦闘の中で、あれが一斉に飛んできたことはない。光球の数は3つ。
「きた…っ！」
第一球。は、空振り。
打てなかった光球が俺に命中する。
「く…そ…ッ！」
休む間もなく第二球。
釘バットに光球がミートし、前方に飛んでいくが…
「ハズレか…。ただ返しゃいいってわけじゃねーんだな」
しかし俺を狙って飛来する光球は、明らかにストライクゾーンから外れている。打つことさえ難しいあの球を正面に打ち返すなんて、それこそプログラムの助けでも無い限り俺には…

『…ねぇ怜悧、さっきから画面に○とか×とかのボタンが出てくるんだけど、これってなんなの？』
「それだァァァ！！」
『え！？え！？何が！？何の話！？』
「話の流れで分かれよ！画面にボタンが出てきたらそのボタンを押すんだよ！」
『…そんな話の流れ、なかったもん…』
子供のように反論をしながら、それでも一応ボタンを押した。
第三球、俺も釘バットを振る。
当たりはしたが、やはり俺を狙って放たれた光球なので、正面からは捉えられず、光球の横を叩くような形になった、が。
光球は放物線を描いて飛んでいき、蜘蛛春風に命中する。

「よっ「痛っ！？」しぉー…」
春風と同じ顔したやつに春風と同じ声で悲鳴をあげられると、素直に喜べない…。
同級生の女子を苛めてるみたいな気がしてきた…。
『気に病むことはありませんマスター。あれはあれです、『涙は女の武器』と同じ理屈です』
「ちぇっ、バレちゃった。緑野くん優しそうだから、つけ入れると思ったんだけどな…」
「お前実はそんなしたたかなやつだったのか！？」
俺の持つ春風のイメージがガリガリ変わっていく。今まで学校で見てきたのは、どうやら本当に表層でしかなかったらしい。
…しかし今の会話、なんか違和感があるんだが…気のせいか？気のせいだよな。
下手に伏線を張るようなことして、何でもありませんでしたじゃ格好つかねーし。
「でもこれじゃ跳ね返されちゃうんだね。だったら…」
そう言って蜘蛛春風は、先ほどとは比較にならないほど大量の光球を召喚し、それらをそれぞれ五ヶ所に分けて集約し始めた。
「ぐみちゃんたちがお喋りしてるときに、緑野くんには見せたよね」
「あー、見た見た。あのアクセラレータみたいに圧縮して撃つレーザーのやつだろ？」
「あくせろりーた？誰それ？」
「お前が実はとある魔術の禁書目録知っているんじゃないかという疑いが急速に頭をもたげるような的確な間違いかただが、本当に知らないのなら気にしなくていいよ」
１つ、また１つと、光球はそれぞれの箇所に吸い込まれ、そのたびに新たな光球が召喚される。
１つ、また１つと。
「そう…あのレーザーをこれだけ撃てば、打ち返せないよね？それとも、今度はバントとかを試してみる？」

「いやいや、バントって自分がアウトになるのが前提じゃん」
そして。
黒い閃光が、俺の視界を引き裂いた。

閑話→とある少女の日常破綻

『きもい。学校来るな』

そんな内容の手紙が、私の下駄箱に入っていた。

五通ほど。

昨日、一昨日は三通だったのに、少し増えてる…。

本当のことを言えば、私には苛めを受ける心当たりが全く無い…のだけれど、こうして受けている以上、私の何かが彼女たちには気に入らなかったのだと思う（　クラスの男子は直接何かしてくるから、彼らのやったことではないはず　）。

それが何なのか教えて欲しかったけど、もし他のクラスの人なら話しかけるのも怖いし、そもそもこの手紙には名前が書いてない。

どこにぶつけたらいいのかわからない憤りを吐き出すように、手紙をくしゃくしゃにしてごみ箱に投げつけた。

人の手紙をぞんざいに扱うのは良くないけど、内容も良くなかったから、おあいこだよね。

◇

「うん？元気ないねぇ、どしたの？おはよー！」

「…何でもないよ。おはよう」

苛め（　って呼んでも構わないよね、あれ　）が起きてからしばらくして、やっとるかちゃんが異変に気付いた。

…もうちょっと早く気付いてほしかったというのが私の素直な気持ちだったけれど、これは私が上手に取り繕えていた証だと、前向きに捉えることにする。

その後は他愛のない話をして、先生が来てからそれぞれの席に戻った。

先生が配ったプリントを、すぐランドセルにしまう。

私の机はごみ箱じゃないのにという不満を、呑み込みながら。

◇

だからって何でランドセル？
ごみ箱なら教室の前のほうにあるのに…。
何で私なの…。
「あれ？お前何それ？」
そんなことを考えて泣きそうになっていたら、後ろから男子の声がした。
振り返って見てみると、いつも私に何かしてくる男子が立っていた。
クラスの女の子は、みんなこの子のことが好きらしいけど、私は嫌い。
だっていつも、私のリコーダーを奪い取ったりとか友達と一緒になって私をからかったりとか、私だけに意地悪するんだもん！
男子も女子も、私の何が気に入らないのよー…！
どうせまた、何か意地悪しに来たんだ。そう思ったけど、意地悪男子は私の予想を裏切った。
「おいこれやったの誰だよ！出てきて謝れよ！」
「ちょっ…！？やめてよ、私平気だから！」
「いいわけねーだろ！隠れてこういうことするやつは最低だ！」
「えぇっ…何これ！？そういえば最近元気なかったけど…まさかこれのせい！？」
騒ぎを聞きつけ、るかちゃんもやってくる。
心配かけないように黙ってたのに～…！
「私は大丈夫だから、ほっといて！余計なことしないでよ！」
「余計ってなんだよ！犯人捕まえなきゃずっとこのままなんだぞ！？」
わかってたよ、それくらい。

でもね、結果として、それはやっぱり余計なことだった。
その騒ぎの２日後。
下駄箱の中の十通近い手紙の中に、るかちゃんの名前が書いてある封筒を見つけた。
信じられなかった。
信じたくなかった。
だから、私は。
その封筒を開封した。

最初のダンジョン《エントランス・トゥ・ハート》→君の価値

「あの…私は本当に平気だからさ」
「うるさいっ！あんたが良くたって私が良くないのよ！」
懐かしい声が聞こえる。
あいつがパーティーから離脱したのはついさっきのことなのだから、懐かしいと言うほど離れてはいないのだけど。
「…あの」
「何よ！？」
多分（ というか確実に ）俺が蜘蛛春風と戦っている間に色々試し、そしてそれらが全て駄目だったのだろう。かなり苛立っているのが、遠目にも分かる。
「春風　薫の一部である私には、人のこと言えないんですけど、あなたはその…拘り過ぎていませんか？」「……何に？」
「助けることに。あなたからは、私に似たものを感じるんですけど…」
「確かに似てるかもな」
「「っ！？」」
自分たち以外の存在の乱入に息を呑む女子２人。
俺はそれに構わず、幸のいる牢屋の中に、先ほどの戦利品を投げ入れる。
「頑固なとことか、そっくりだよ」
「…助けないんじゃなかったの？」
「助けねーよ？ただ、力を貸せそうだったから、貸しに来ただけだ」
人は１人で勝手に助かるだけ。
この言葉は、自分の臆病さや卑怯さを肯定できる。
助けない自分を、正当化できる。
だから俺は…この言葉を好んで使う。
「これハクちゃんの眼帯？」

「「ハクちゃん？」」
聞き慣れない新たな人名に、今度は俺と、名も知らぬ女子の声が重なる。
ハクちゃんてまさか…あの蜘蛛春風のことか？
「緑野くんはそう呼んでるんだ…。まぁうん、そうだよ。《強迫観念》のハクちゃん」
《強迫観念》…なるほど。それであんなセリフを言ってたわけか。
……あれ？そういやあのレーザー乱射されてからのこと、俺話したっけ？
話したような気がしてたけど…もし話してなかったら、読者はレーザー乱射からいきなり戦闘が終わったように見えるわけか。
じゃあ、ここらで一度しっかりと、あの時のことを振り返ろう。

◇

俺の視界を、黒の閃光が引き裂いた。
かわせない――――そう思った。
ロックマンエクゼで言えば、横二列をまとめてぶち抜くようなレーザーが、俺を中心に五本。
かわせないなら、凌ぐしかない。
俺は釘バットを正面に構え（当たり前だがバントの構えではなく、防御の構えだ）、レーザーを防ごうと試みる。
結果を報告すれば、防御は必要なかった。
むしろ邪魔だった。
理由は、誰かが盾になって、代わりにレーザーを受けてくれたからだ。
そして俺は、身代わりになってくれたためにレーザーが直撃し吹っ飛んできた誰かを、あろうことか釘バットで受け止めてしまったのだ。
「おい…！？大丈夫か！？」

正面からレーザー、背面から釘バットの直撃を受けて（ 改めて文字にしてみると酷い仕打ちだ ）踞っているそいつに声をかける。
話す順番が入れ替わったために、すでにネタバレしてしまったのは申し訳ない限りだが、当然こいつはあの名も知らぬ女子ではない。
この頃のあいつはたぶん、何一つうまくいく方法がなくてイライラし始めたところだろう。
この物語に、決別した仲間が助けに来てくれるとか、それまで敵として戦っていた奴が仲間になってくれるとか、その手の美談は無い。
この物語は喜劇であり、愚痴なのだ。
だから、レベル上げのときによく見た服を着て踞っているこの女子だって、敵でも味方でもなくて。

「うぅ…痛いぃ〜…。緑野くん、怪我はない？」

ただの――――《お人好し》だ。
「何で…助けたんだよ？」「うん？何でって、何で？誰かがピンチだったら、助けるでしょ？普通」
確かに、『普通』ならそうかもしれないけれど。
俺にとって、お前は敵ではなかったけれど。
お前にとって――――俺は仇じゃないのか？
お前の仲間を一方的に傷つけた、憎き敵じゃないのか？
それこそ『普通』なら――――蜘蛛春風と一緒になって、仲間の仇を討とうとするんじゃないのか？
俺の疑問に、俺の詰問に。お人好しはそれでも優しく微笑み、ゆっくり首を振ると、差し出すように両手を広げて、一言。

「大丈夫。私はあなたをいじめないよ」

この物語は、風車に戦いを挑んだ、滑稽な道化の空回りを描いた

喜劇であり、主人公になれなかった道化が居酒屋で溢す愚痴のような戯言だ。
だから道化は――――。
終始、涙なんか見せないんだ。
「うわっ！？どうしたの緑野くん、どこか痛いの！？」
直撃を受けた自分よりも、情けない俺を優先してしまうような底無しの優しさに心を打たれたりしないし、これだけ優しい女子を見捨てようとした自分を悔いたりもしない。
「私、庇いきれなかったかな！？他のビームが当たっちゃったかな！？」
ただ、それでも確信できる。
名も知らぬ女子の言うとおり、こんなのは嘘だ。
「もー！何してるのハクちゃん！私たちじゃない人に酷いことして、ダメじゃない！」
他人にこれだけ優しくなれるやつが、幸せになっちゃいけないだなんて。
他人にこれだけ優しくなれるやつが、その優しさを欠片も自分に向けられないだなんて。
そんなの嘘だ。
そういうことにでもしないと、あまりにも報われない。
「…怜悧」
『はい、何でしょうマスター』
「この場での会話を他人に伝える方法って、何かないのか？」
わかってる。
世の中には、優しいやつが報われない理不尽が、真面目なやつが損をする不条理が当たり前にある。
『会話…ですか？それはもちろん可能ですが…誰に何を伝えるのですか？』

頑張っても報われない。
努力しても実らない。
春風のこれだって、そんな数多ある理不尽の1つに過ぎない。
だけど…。
そんな理不尽が目の前にあるんだ。
例え実らなくても、それを絶とうと努力するくらい、構わないだろう？だって――――

「《幸》に…春風に。お前は幸せになっていいんだって、伝えたい」

だって――――ここは、ゲームの中なのだから。
少しくらい、夢を見させろや。

『それでしたら、この場をしのいで口頭で伝えればよろしいかと』
「それじゃ伝わらねーと思ったから聞いてんだよ！！」
『ていうかマスター、寄り道し過ぎじゃないですか？読者の皆様も、いい加減話進めてさっさと終わって妹とイチャイチャしてろみたいに思っているのではないでしょうか』
「途中までは本当にそう思われているんじゃないかと肝を冷やしたけれど、最後まで聞いてみると読者の代弁というよりお前が面倒くさくなっただけだよな！？」
『正直ぶっちゃけますと、マスターが他の女性のために頑張ることがおもしろくありません』
「そりゃ娯楽性は無いかもしれないが…」
人を助け…人が助かる手伝いをするんだから、面白いとかつまらないとかじゃないだろうに…。
この温度差は何なんだ…？
ままならねぇなぁ。
『…怜悧、しょうがないよ。にーちゃんは、こーいう人だから』
怜悧と俺の議論をまとめるように打ち切るぐみ。

その目は、どこか諦めたような、それでいて、こうなることを期待していたような…そんな目に見えた。
『…あの蜘蛛は、身に着けているものも含めて1つの感情です。なので、彼女の所持品を1つ剥ぎ取れば、この場で起きたことの記憶を回収できます』
「剥ぎ取るって…。他に何か言い方はなかったのか？」
その言い方だと、俺が犯罪者みたいだ。
いや、どう取り繕っても、やることは完璧に強盗かひったくりのそれなのだけど。
『大義名分を得たからといって、彼女の服を剥ぐとか止めてくださいね』
「俺いつの間にそんな最低認識されてたんだ！？やらねーよそんなこと！」
少しは兄貴を信用してほしいものだ。
続いて俺はぐみを見る。
画面越しに、互いが互いの目を見て語り合う。
意思の疎通は完璧だが、それでもお互い、声に出す。
誤解を生まないために。

「春風を助けたい。力を貸してくれ」
『それでこそあたしのにーちゃんさ！』

蜘蛛春風に向き合う。
と、足元からひょいと、昆布が生えてきた。
見てみると、いつの間にやら現れた《昆布大好き》が、俺に回復アイテムの昆布を差し出していた。
そいつを受け取り、頬張る。
今までのダメージが回復し、力がみなぎってくる。お人好しも同じように、昆布大好きからもらった昆布で回復していた。
「コンティニューだ。自分勝手で悪いけど、負けたくない理由が出

来た」
「ぜーんぜん構わないよ！そんなエモーショナルな変化だけでは、現実は変えられないもの！」
瞬間、始めのそれがただの遊びでしかなかったと思い知らされるような大量の光球を、蜘蛛春風は召喚した。
荘厳な空間が、やり場のない狂気で満たされ、それとともに、召喚された大量の光球が夕立みたいに降り注ぐ。
「――――――ッ！！」
全てを。
俺の体は、俺自身が認識できない速度で駆動し、降り注ぐ全ての光球を弾きとばした。
『えと…画面にボタンのマークが出たから反射的に押しちゃったけど…良かったのかな？』
「あぁ、ファインプレーだ――――！」
言いながら、地面を蹴って蜘蛛春風に飛びかかる。
「いっけェェェ！」
使用したスキル・フルスイングが空を切る。
釘バットを降りおろすその瞬間、蜘蛛春風がその場から消えたのだ。
『上です、マスター！』
怜悧の声を耳に捉え、俺は振り返るように上を見る。
蜘蛛春風は、比較的広いこの空間を所狭しと跳び上がり（　頭なんか天井ですりおろしてんじゃねーか？　）、俺のはるか後方に着地した。
「あれは…！」
俺に向き直った蜘蛛春風は後ろの四本脚で立ち上がり、前の四本脚を俺に向ける。
そして、それぞれの脚に黒い光を灯すと、機関銃のように掃射する――――！
「うおぉぉぉぉぉぉ！？」

怜悧の強化プログラムがぐみのコマンド入力（　と言っても画面に表示されたボタンを押すだけだが　）で発動し、俺の体が本人の意思とは無関係に黒い光球の雨をかいくぐる。
「く……あぁぁぁぁぁぁ！！」
数多の光球を避けながら進む俺に対し、これ以上の銃撃は無意味と判断したのだろう。前四本の脚の黒い光を、銃弾ではなく剣の形に放出する。
俺の身長の倍はあろうかという黒い光の大剣。それが四本、俺目掛けて降り下ろされる。
『させないよっ！』
前転。
体が勝手に回って四本の大剣を回避し、そのまま懐に潜り込む！
「残念だったわね、ここでゲームオーバーよ！」
「は……！？」
蜘蛛春風の怒涛のラッシュ、ラストを飾ったのは蜘蛛の糸だった。
回避は、間に合わない。
左右に蜘蛛の脚、前に糸。
ここで後方に退いてもその場しのぎにさえならない。蜘蛛の糸が当たるのが、少し遅くなるだけだ。
だから、俺は……釘バットで、糸を巻き取った。
「な……っ！？」
扇風機に例えれば伝わるだろうか、釘バットを回転させ、飛来した蜘蛛の糸を巻き取る。
そのせいで釘バットは使えなくなってしまったが……。
「……くぅっ！」
持ち上げていた前の四本脚を、おもいっきり降りおろす蜘蛛春風。だがその脚は俺を狙ったものではなかったらしく、むしろ警戒すべきは結果として脚とともに落ちてきた胴体のほうだった。
「うっ……おぉぉぉ！？」
蜘蛛春風ののしかかりを食らって（　ガルボキューブのＣＭ風に

言うならモサッとぐにゃっとしていて、かなり嫌な感触だった）
地面に突っ伏していた俺の背中で、何か巨大なものが飛び上がったかのような風が巻き起こる。
起き上がってみると、俺の上にいたはずの蜘蛛春風がいない。
「危ない危ない。危うく嫁入り前の体に傷を付けられちゃうところだったよ」
頭の上から声が降ってくる。
見上げると、蜘蛛春風が天井のはじっこのほうにくっついていた。
蜘蛛春風の身長（この場合は、地面から頭までの高さのことだ）は俺の倍。天井はそんな蜘蛛春風のさらに倍高いところをふさいでいる。
「これだけ高いところにいれば、緑野くんの攻撃も当たらないよね」
「…確かにな。最適化されている今の俺でも、そこまでは届かない」
1人なら、何をやっても届かない。
だけど2人、そして3人なら。
「お人好し！昆布！」
俺は助けに来てくれた2人の春風を呼ぶ。2人はなぜ呼ばれたのかわからないといった風だったが、蜘蛛春風には通じたようだ。
「そんなのさせないよ…！あんな2人、私なら簡単に消せちゃうんだから！」
「春風！！」
…いや、俺以外の全員が春風だから、この呼び方だと誰を呼んだかわからないのだけど。
だけど、反射的にそう叫んでしまった。
当然、蜘蛛春風はそんな叫びを意にも介さないし、2人に至っては何で俺が叫んだのかもわかってなさげだったけれど。
そんな2人に、無慈悲にも黒い光球が掃射される。
あの2人は、ゲーム開始直後の俺の攻撃さえかわせなかった。そんな2人に、先ほどの俺みたいに全て避けろと言うのは、あまりにも酷だろう。つーか俺のあれだって、ドーピングの賜物だし。

被弾。
黒の光球が、２人に降り注がれる。２人はかわす素振りも見せず……悪意の雨に、呑み込まれた。
「……っ！」
が、その直後。
俺は信じられない光景を目の当たりにした。
いやもう、本当に色んな意味で信じられない。
「避けられないんなら、当たるたびに回復すればいいんだよ！」
と。
彼女たちの姿は、そう語っているようだった。
「「昆布食べながら走ってくる！？気持ち悪っ！！」」
俺と蜘蛛春風の意見が合った、唯一の場面である。
そう。
回復アイテム『昆布』。　助けに来てくれた春風の１人、昆布大好きは、そのアイテムをどうやら無限に持っているらしく、お人好しと昆布を分け合いながら食べ合いながら、こちらに走って来ているのだ。
……うん、蜘蛛春風を倒すにあたって、確かにお前たちの力が必要だし、そんな俺の意図を知ってか知らずてか、おそらく知らずに俺に呼ばれたというだけでそこまで頑張ってくれるというのは嬉しいけれど……ごめん、やっぱ気持ち悪い。
あまりの異様さに気圧されたのか、蜘蛛春風の攻撃が止む。その間に俺は２人と合流し、蜘蛛春風のところまで跳ぶのを手伝ってほしいと伝えた。
「じゃあまず最初に私がすーちゃんを踏み台に跳ぶから、緑野くんはその後同じように跳んで、さらに私を足場に飛び上がる！そんな感じでおっけー？」
「いやいやいや、よくねーだろ。俺はノーダメージだから構わないけど、お前ら踏まれるんだぞ？」
しかもすーちゃん（　たぶん昆布大好きのことだと思う　）なん

か自分の三倍ほどでかいやつらに二回踏まれる……てか踏み潰されるわけだし。
「んー……でも私たちの力じゃ緑野くんをあそこまで連れていけないし、私たちが行ってもダメージは与えられないし」
だから、よろしくね緑野くん。
お人好しがそう言ってこの議論を打ち切ると、すーちゃんは既にスタンバっていた。うーむ、潔い……。
「……よしっ！」
掛け声とともに、すーちゃんに向かって駆け出すお人好し。
そしてその2人を、再び蜘蛛春風の攻撃が覆う。
「く……っそぉ！」
お人好しに続き、俺も釘バットを捨てて走る。
蜘蛛の糸を巻き取るのに使ったため、もう武器としての役割を果たしそうにないし、走るにあたって邪魔だと判断したからだ。
女子をあんな銃弾の雨みたいな攻撃にさらしているという事実が俺を苛んだが、そんなことを言っている場合ではない。
他のことに気を取られて失敗しましたでは、それこそ申し訳なさすぎる。
「よっしゃーっ！」
威勢のいい掛け声とともに、まずはお人好しが。
その後、同じようにすーちゃんを踏んで、俺も飛び上がる。
そして――――
「緑野くん！」
「……悪いっ！」
お人好しの背中を借りて、俺はさらに上へとジャンプする！
「――――ッ！」
目の前の蜘蛛春風の表情が驚愕のそれに染まり、続いて俺に狙いを定める。
「幸は出しちゃいけない……私は幸せになっちゃいけない！あの子に酷いことをした私が幸せになるなんて許されない！！」

ここで格好いい台詞の１つも決められないから、俺は主人公になれないんだろうな。
羽が生えてるわけではないので、俺の滞空時間は僅かだ。足場も不安定だから、威力も落ちる。
勝負は一瞬。
落下の瞬間であれば、足場の悪さによるダメージの軽減は緩和できるはずだ。
その瞬間が訪れる前に、ありったけの力を拳に込める。
無論、釘バットよりは数段威力は落ちるが、何の問題もない。

グレた少年少女を叱るときは、コイツを使うものと相場が決まっている。
「いい加減目ェ覚ませこの加害妄想少女がァァァ！！」

これだけ優しいやつが、これだけ反省しているんだ。
何やったか知らねーけど、お前は道を踏み外してしまったのかもしれないけれど。

幸せになっちゃいけないなんてことは、ないんじゃないかな。

最初のダンジョン《エントランス・トゥ・ハート》→その問いにはきっと、不正

――――とか。
そんな色々を見終わったのだろう、幸はゆっくりと眼帯を外す。
そして細いため息を1つつくと、俺に視線を注いだ。
「……えっと」
「……」
何も言わず、ただじっと俺を見つめる幸。
その目は何も考えていないようにも見えるし、また全てを見透かしているようにも見える。
語り部がこんなことを言っていいのかと自問せざるを得ないが、見たものをどう感じるかなんて、観測者によって違っているし、観察者によって異なっているのだ。
「例えばもし」
とか、益体のないことを考えていたら、幸がいきなり声をかけてきた。
本当にいきなりだ。
結構ビビった。
「例えばもし、親友を酷く裏切った人がいたとして、そのせいで親友は遠くに逃げなくちゃならなくなったとして、裏切ったその人はそれでも許されると思う？」
……うん、まぁ。
考えるまでもなく『その人』は春風なのだろうけれど、さて難しいことを聞かれたものだ。
正直なことを言えば、俺の答えは「そんなの知るか」である。
非難も批判もあるだろうが、完全な他人事なので、本音はそんなものだ。
大体俺に何を期待しているんだ？俺はついさっきお前を見捨てるという決断をした男だぞ？

これっぽっちも正しくない、間違いだらけの外れた人間だ。
そんなやつに感動の名言を求めるなよ、俺は上条　当麻じゃないって前置きしておいただろうが。
ん？いや待て、そういやこの場にはもう1人いたじゃないか。
そうか、そっちに聞いてたんだな。それを俺ってやつは、勝手に自分に聞かれたと思い込んで、自意識過剰も甚だしいぜ。やれやれ、いらない恥をかいちゃったな。
「……」
「……」
そう考えて名も知らぬ少女を見ると、めっちゃ俺をガン見していた。
明らかに俺が話すのを待っている。
……えぇー。
マジでか。
つーかお前は俺が間違えてんの知ってんじゃん。何で俺？
「（だって、何て言って説得したらいいのかわからないんだもん）」
「（アホかァァァ！！そんなもん俺だって知らんわ！！）」
「（けどあんた高校生くらいじゃない！だったらあーゆーのを説得する方法の1つや2つ知ってるでしょう！？）」
「（高校生を買いかぶるな！知るわけねーだろ小説の主人公じゃあるめーし！大体高校生っつーならお前だって同い年ぐらいだろうが！）」
「（残念でした、私は小学生ですー！！）」
「（そんなにスタイルのいい小学生がいるかァァァ！！高校生でもなかなかいねーぞ、そのプロポーションのやつ！）」
「……やっぱり、許されないよね」
見たものをどう感じるかなんて、観測者によって違っているし、観察者によって異なっている。
幸は俺たちの沈黙をそう解釈したらしく、消え入るように呟いた。

「そんな……っ、そんなことない！」
慌て幸の解釈を否定する少女。
けれど、続く幸の言葉に言い返せず、再び黙ってしまう。
「どうして『そんなことない』なんて言えるの？あなたは私に裏切られたあの子じゃないのに」
「だって……あんたは優しくて……」
「それでも私は裏切った。その事実は、私の人格が何だったとしても覆らない」
「……っ」
悔しそうに顔を歪める少女。その悔しさをぶつけるように俺を睨む。
なんとかしろ、ということなのだろう。
あいつに自分の幸せを肯定させろと。
そういうことなのだろう。
やれやれ、無理難題を押し付けてくれる。
この手のやつは、自分にとってプラスなことは信じない。マイナスのみが真実だと思い込み、信じ込む。そんなやつを幸せになんて、できるわけがない。
本人が助かろうとしない限り……周りの助けは無意味だ。
だから俺は、助けることを諦めて、一言だけ。

「許されないと思う」

「な……っ！？」
「……うん」
少女の目が見開かれ、幸は粛として受け止める。
少女は何か言いたげだったが、それらを言葉にできないでいるようだ。
相当混乱しているらしい少女をスルーし、俺は続ける。
幸を、春風を追い込む言葉を、紡ぎ続ける。

「大切な誰かを裏切ったなら、そのことを後悔しているのなら、お前は許されるまで許されちゃいけないし、罪に対する罰を背負わなければならないと、俺も思う」
「……うん」
今の春風にとって、自分の考えや行動を肯定する俺の言葉はむしろ救済となっているようで、幸はいっそ心地よさそうに首肯する。
「だから……」
だから俺は紡ぐ。
お前は間違っているんだと伝えるために、お前は幸せになっていいんだと伝えるために、間違った言葉を紡ぎ続ける。
「だからお前は……幸せにならなきゃ駄目なんだ」
「「……ぇ？」」
きょとんとする幸と少女。
……流れで納得してもらえるかと期待したけどやっぱり無理だった。
当たり前だ。
上条さんレベルの熱弁であったならともかく（　それでも無理だろ　）、ああも脈絡がなくては吉井　明久でさえ論破でき『そ！そうだったのかぁーーー！！』ないと思ったけど、説得されている馬鹿がいた。
残念極まりないが、我が愚妹だった（　言うまでもないが、上の妹のほう　）。
あんなずさんな説得に感化されたうちの馬鹿は置いといて、俺は脳をフル回転させる。
あの欠陥だらけの説得に説得力をもたせるための、悪知恵を巡らせる。
「幸、お前は何で幸せになっちゃいけないんだ？」
「え？いやだから、大事な親友を裏切ったから……」

「幸せになることが後ろめたい。幸せになることに罪悪感を感じる」
首肯する幸。
「だからだよ。だからこそお前は幸せにならなきゃいけないんだ。幸せになって……」

「その後ろめたさを、その罪悪感を背負って生きなければならない。それが、お前に課せられた罰だ」

「「……！！」」
２人の少女が絶句する。
まぁ、当然か。
幸せになることが罰とか、あまのじゃくにも程がある。どんだけひねくれているんだお前はという話だ。
しかしこのリアクションを見る限り、説得は成功したと考えていいだろう。
間違えまくった説得だけど。
外れまくった説教だけど。
「……ここから出て……」
荷を分けてもらうどころか、更なる重荷を押し付けたようなものだけれど。
残念ながら、俺には正解がわからない。
何もできない俺は、不正解することしかできない。
情けないことに。
みっともないことに。
けれど。それでも。
「ここから出て……幸せになったなら
「いつか……許してもらえるのかな？
「本当に本当の意味で……

「幸せに、なれるのかな？」
情けない俺の言葉を、みっともない俺の説得を、《幸》は信じている。いや、信じたいと願い、縋っている。
なんだよ。
なんだかんだ言って……やっぱり、幸せになりたいんじゃねーかよ。
まぁ、こいつは春風の《自身の幸せを望む》感情だしな。
きっかけがあれば、きっかけさえあれば、自分で自分を助けることのできる感情だ。
けれど。それでも。だから———
「なれるよ。絶対許してもらえるし、必ず幸せになれる。健気な少女に意地悪すんのは、継母かその娘だけだぜ」
だから俺は、信じてるよ、それは必然だって。
お前は謝ったんだ。
涙の数だけ謝ったんだ。
だったら許してもらえるよ。
お前は確かに、親友を裏切ったのかもしれないけれど。親友と過ごした幸せは、儚く散ってしまったかもしれないけれど。
お前らの友情は、そんなことで散ってしまうほど儚くは、きっとないだろう？
だって相手は、重度のお人好しにして極度のおせっかいなお前の、親友なのだから。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4821w/

ＲＰＧ始めました

2011年11月21日22時47分発行